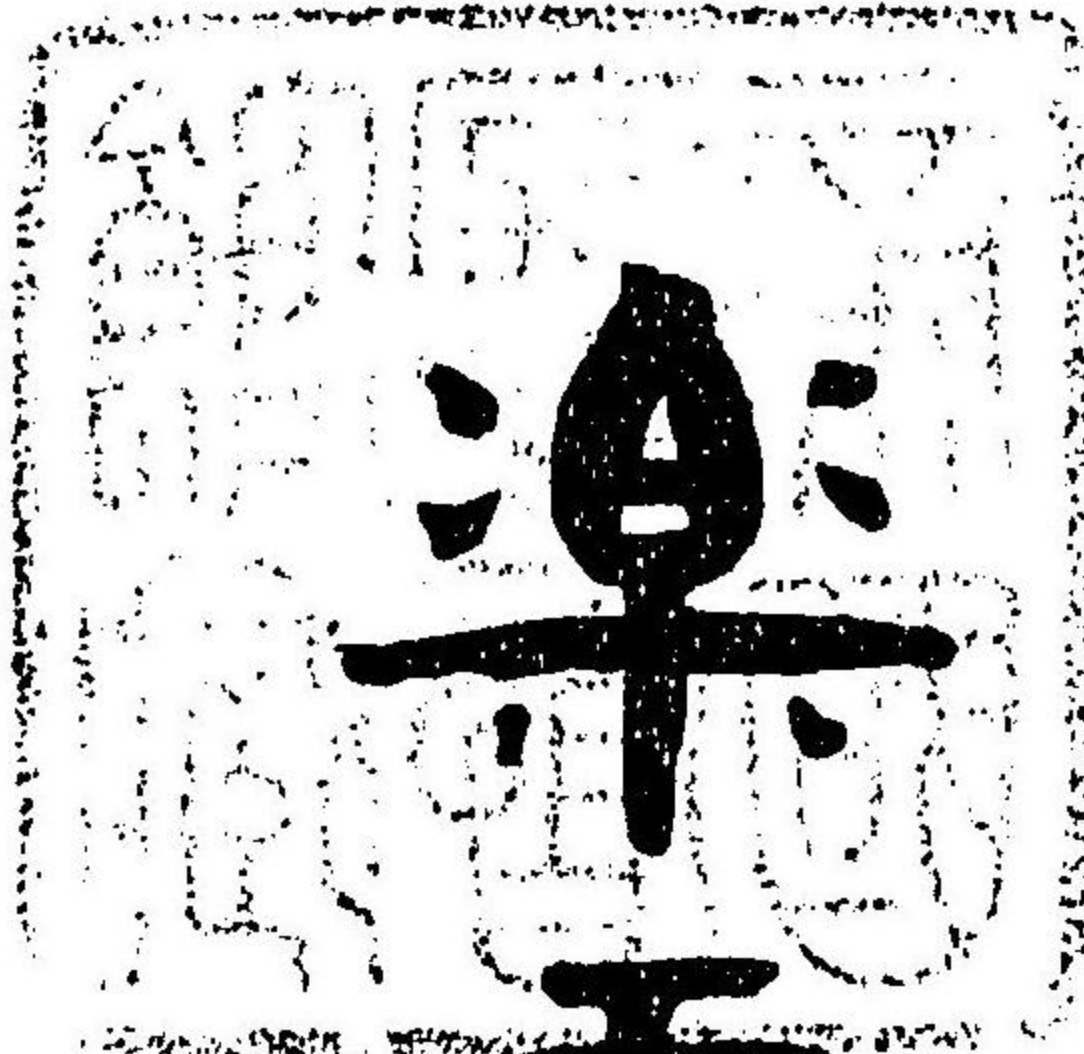


曹洞宗大學講師 忽滑谷快天著

樂天生活及妙味

東京 服部書店  
文庫書店

181-181



樂天生活之妙味

48. 4. 27  
圖書

## 序

予幸にして貧家に生れ今や頌白に及んで備さに貧中の妙味を感得す、乃ち我同胞の貧窮なる者と共に此欣びを同うせんとす、これ本書第一章に貧中の妙趣ある所以なり。予十七歳より疾病に苦み自ら以爲らく而立の齡を超ゆると能はざらんと、然るに不惑を過ぎて愈壯

健を加ふ、此間病中の妙味を感得する一再にして止まず、便ち世の疾患に苦む人をして安んずる所あらしめんと欲す、これ第二章に病中の妙趣ある所以なり。予天賦偏固にして渡世交際の術に於て最も拙なり、是に於て上を凌ぎ下を虐げ争鬪頻りに起る、此間逆境の妙味を感得して潜かに喜ぶものあり、これ第三章第四章に於て不幸の妙趣と逆境の妙趣を説

く所以なり。予明治三十年恩師の入寂に遇ひ、ついで巖君の逝去せらるゝあり、七顛八倒のうち前後十年を経たり、此間大いに人生不如意の妙味を感得す、これ第五章に不如意の妙趣ある所以なり。予平生信ずる所、禪にあり、一言一行禪意を體現せんとを期す、而して禪意の究極する所は生死を明むるにあり、これ末章に死滅の妙趣ある所以なり。之を要する

に本書は世の不幸にして逆境に沈淪する人の  
爲に同情禁じ難く、共に手を携へて天を樂み  
命に安んじて道に入らんとするにあり。

明治四十三年三月

忽滑谷快天 識

目次

第一章 貧中の妙趣

- 一、貧中の樂み……………一
- 二、貧の八徳其一……………二
- 三、貧の八徳其二……………四
- 四、貧を免るゝの道……………八
- 五、金錢と道徳の並行……………二
- 六、紙衣の十徳……………三
- 七、安心は人生第一の寶……………四
- 八、武公の知足……………六

第二章 病中の妙趣

九、仙巖和尚の洒落……………一七

十、家貧占力量……………二〇

十一、病中の樂み……………二五

十二、病氣の使命其一……………二五

十三、病氣の使命其二……………二六

十四、病氣の使命其三……………二七

十五、病氣の使命其四……………二七

十六、病氣の使命其五……………二八

十七、神經の身體に及ぼす影響……………二九

十八、神經と身體の關係……………三〇

第三章 不幸中の妙趣

十九、病氣と自己暗示其一……………三三

二十、病氣と自己暗示其二……………三三

二十一、先づ佛心を知れ……………三六

二十二、釋慧嵐の悟道……………三五

二十三、不具者の樂み……………三五

二十四、天橋立股目鏡……………三六

二十五、料理法と生活法其一……………三六

二十六、料理法と生活法其二……………三六

二十七、料理法と生活法其三……………三六

二十八、服部元好の話……………三七

二十九、涅槃經の喻……………六

第四章 逆境中の妙趣

三十、逆境の妙用……………五

三十一、逆境の功德……………六

三十二、逆境の利益……………七

三十三、逆境は恩に感せしむ……………七

三十四、逆境は信を生せしむ……………七

第五章 不如意の妙趣

三十五、人生は不如意ならざるべからず……………八

三十六、不如意中の慰安……………九

三十七、不如意中の樂み……………九

三十八、不如意中の如意……………九

三十九、不如意の嘆は我儘より生ず……………九

四十、不如意の嘆は佛心を知らざるより生ず……………九

四十一、不如意の嘆は不徳より起る……………九

第六章 害惡の妙趣

四十二、無理なる害惡の説明……………一〇

四十三、天災地變の意義……………一〇

四十四、人間社會に於ける害惡の意義……………一〇

四十五、相殺の妙……………一〇

四十六、生存競争の妙味……………一〇

# 樂天生活の妙味

忽滑谷快天述

## 第一章 貧中の妙趣

一、貧中の樂み 今日世間の人々が猫の松魚節に於けるが如く又狗の牛肉に於けるが如く渴望しつゝあるものは何であるかと云へば金であらう。されば彼れ等は金さへ得れば成功と思つて悦んで居る、従つて彼等が最も厭ひ苦む所のものは謂ふ迄もなく貧乏である。福の神の繪を見ると立派な衣裳をつけ、寶を持つて莞爾／＼笑つてゐるが貧乏神の繪を見ると黒藁のやうな着物をきて濫圍扇を持つて泣きさうな顔をしてゐる。これ畫工が富める人と貧しい人との心狀を分析して描いたものであらうと思ふ。併し富める者は常に樂しく、

四十七、生存競争は智慧を生せしむ……………二六

## 第七章 老死の妙趣

四十八、吾人は老死を歓迎す……………二六

四十九、老死は何故に欣ぶべきか……………二五

五十、生死を明むるは佛家の一大事なり……………二九

五十一、禪……………三三

五十二、四料簡……………三三

目次終



貧しき者はいつも哀しいと定つてゐるやうに考へたなら大なる誤解である。吾人の如きは貧乏の點に於て敢て人後に落ちぬ側であるが一向平氣である、否、大いに快活なる生活を爲しつゝある。何となれば吾人は幸にして貧家に生れて子供の時から餘り贅澤に暮したことが無い、のみならず吾人は一粒の米をも握つて生れたのでなく、一縷の糸をも身に著けて生れたのでなく、裸體跣足で生れて來たのであるから、今日粗末なる衣裝でも身に著けて居らるゝは、佛の恩親の恩の廣大なるに由ると思ひ、一汁一菜の淡泊なる食物でも、三度く餓ゑを凌ぐとの出來るは何より難有とであると感じてゐる。

二、貧の八徳其一 貧乏には種々なる徳がある。先づ第一に貧なれば人に驕るやうなことはないから自然と謙遜になる。禮記に所謂 救不可長 欲不可從 志不可滿 樂不可極 といふ四不可の金言にも契ふであらう。第二に貧なれば足ることを知るの徳を養ふことが出来る。古句に

鶏母浴身沙當水 猫兒洗面唾爲湯

とある如く鶏は水の代りに沙で行水をつかひ、猫は湯の代りに唾で面を洗うて満足して居る、されば人の欲には限りの無いもの故、貧なりとも満足すれば甚だ愉快である。第三に貧なれば身も心も二つながら自由で出るにも入るにも心配がない。白樂天の語に 富貴にして苦あり、苦は心の危憂にあり、貧賤にして樂あり、樂は身の自由にある。

とある通りで貧なる者は非常に自由である。第四に貧なれば粗末なる食物でも甘く味うて食ふことが出来る。西洋の諺に 空腹は最上の料理なり とある、これ實に味のあつた語である。第五に貧なれば他人の爲に嫉まふことが無い。乞食長者一茶の吟に

紅葉のちりしく山にまろねして

われも錦を身にまといふかな

とあり、嘉永五年八月に江戸なる下谷の山下邊にて倒れたる非人の詩に

一鉢子家飯 孤身幾回秋 冬暖草筵裡  
夏涼橋下流 不空還不立 無樂人無愁  
人若問此世 明月浮水中

とあり、其歌に

月さへも高きにすめば障りあり  
おきふしやすき草のさむしる

とある。斯かる境涯は他人の爲に嫉み誹らるる心配は決して無い。

三、貧の八徳其二 第六に貧なれば自然に道心が起る。古人が道は貧にありと謂ひ、永嘉大師が身貧にして道貧ならずと仰せられたのも此理である。第七に貧なれば放逸の行ひをせぬやうになつて操守が堅くなる。和州大安寺の道慈和尚が長屋王の宴會に招かれたるを辭する時に、

緇素杳然別 金漆諷難同 衲衣蔽寒體  
綴鉢足飢嘔 結羅爲垂幕 枕石臥巖中  
抽身離俗累 滌心守真空 策杖登峻嶺  
披襟受和風 桃華雪冷々 竹溪山沖々  
驚春柳離變 餘寒在單船 僧既方外士  
何煩入宴宮

とある清貧の操眞に欽羨に値する。第八に貧なれば貪慾の害を免る事が出来る。

昔し桂文治といふ落語家が關西より關東へ下る時に箱根の關門へ通りかゝつた。然るに手形が無い爲に關守が通行を許さぬ、そこで文治が『自分は桂文治といふ落語家で怪しい者では御座りませぬから、是非通してください』と嘆願に及んだ。其時關守のいふには其方が眞に落語家に相違ないなら、即席に此處で落語をして聞かせる、さすれば手形はなくとも通してやる。『左襟で御座りませぬ』

すか、委細承知致しました、何卒落語の題を一つ頂戴致し度う御座ります」と文治は答へた。然らばといふので「死なば今」といふ非常な難題を出されました。併し文治は流石に落語の名人であるから忽ちに話しを作りまして、

エー申上ます大阪にて人知らぬ者なき持○長者鴻の池の旦那が此間御逝去になりました所、親族一同評議仕りまして、地獄の沙汰も金次第と申すところから、死んだ旦那に金を持たせてやるが宜からうと一決して、金千兩を封金に致して棺の中へ入れてやりました。すると隠坊といふ卑しい者が死人を取扱ひまするので、彼等が潜かに此千兩の金を抜取りまして、賤金を包みまして棺の中へ入れて埋めました。死んだ旦那はさることとは少しも存じませんで、三途の河にさしかかった時、例の賤金を渡守に少しばかり賄賂に遣はしましたから渡守は喜んで對岸へ渡してくれました。それから遙に前方を見ますと、青鬼赤

鬼などが虎の皮の褌をしめてやつて來ます、そこで此鬼供にも賤金の賄賂を握らせたから、彼等も金色の齒を出して莞爾くもので通してくれる。それから森衣の婆がゐりましたから、そのと婆の袂に賤金を入れてやると、婆もニヤリと笑うて丁寧に挨拶して閻魔大王の前につれて行て呉れました。旦那は更に閻魔大王にも賤金を多分に贈りましたので、大王の御氣嫌斜ならず、娑婆世界でした悪業は皆帳消にして、極樂世界に往て宜しいといふ裁判を受けました。然るに鴻の池の旦那が極樂に到着した頃、地獄の閻魔大王を始め鬼供が賄賂の金包を開いて見ると賤金でありますから、大いに怒りまして、おのれ亡者め能くも我々を欺き居つたな、其儀なれば一刻も猶豫はならぬとあつて、閻魔大王より赤鬼を使として早打の注進を以て極樂世界へ亡者取戻の談判に及びました。すると此事をお聞きになりましたる地藏菩薩が、地獄の役人供は不屈千萬である、亡者より賄賂を

取つて極樂へ往生させるやうでは地獄はあれども無きに均しい左様の儀ならば今後は地獄は廢止して極樂のみで幽冥の世界を支配することに致すといふ勅令を御出しになりました。されば只今の所、黄泉は極樂のみで地獄は御座りませぬ。死ぬなら今」が一番宜しう御座ります。

と一場の落語をしたさうである。思ふに近頃我國は桂文治の落語の通りで、地獄の赤鬼青鬼たるべき警官も間魔たるべき司法官も、妻衣婆たるべき國會議員も金錢崇拜熱にうかされつゝ、賄賂は何れの社會にも勢力を逞うしつゝあるは實に長大息の至りである。これ皆貧中の樂を解せぬから起る國民の大弊害であります。

四、貧を免るゝの道 斯く論ずればとて吾人は好んで貧乏に爲れと言ふのではない、貧乏の中に居て貧乏に囚はれず、絶えず清淨なる心鏡を拂ひ拭ふて其中に佛陀の御姿を拜するを樂みとするのである。笑ふ門には福來るてふ謎の如く欣びのある所には必ず幸があり福が

あるから、早晚貧乏神の支配を免れて福祿壽を獲得することが出来るに相違ない。

伊豆國加茂郡稻取村は有名な模範村であるが、明治十一年に田村文吉氏が村長になつた頃は伊豆の三難村の一として算へられたもので、村民は酒を飲み、賭博に耽り、貯蓄心なく、入谷と稱する百四十三戸の字だけでも租税の未納が千五百三十圓もあつて、一戸平均十圓以上の滞納をして居た程の難村であつた。されば明治十八年に村政の荒廢した時には小學校の教員に月給さへ拂へなく爲つて、小學校の閉鎖までした。然るに田村文吉氏の献身的努力は、村民を鼓舞して善良の風習に赴かしめ、其上物質的の富も大いに増加して、堅固なる石造の村役場を建てたり、病院や郵便局を設けたり、水道を通じたり、村内一圓道路に一間幅の敷石をしたり、四萬五千圓もかけて學校を建築したり、其基本財産も向後百年目には六十五萬圓に上る程の一大模範村と爲つた。

かくして明治廿七八年の日清戦争の時の如きは徒らに祝勝會を開いて酒を飲むことをせず、七十町歩の山林を新たに開いて桑園を作り、入谷だけでも何萬といふ収入があるやうになつた。實に田村氏の事業は美舉中の美舉と謂はねばならぬ。

斯の如き田村氏が事業の効果は如何なる原因によつて生じたかと云へば氏が心掛こゝろが一つに由つたので、其心掛といふは、

天地間の凡そ物は天の力と地の力と人の力と三つ集らずして出来たものは一つも無い、五穀を作るにも第一に天候や雨露の力、第二に地の培養、第三に人の勤勞が加はつてできる。家を建てるにも衣服を製するにも、此三つの力に依らねば何物も成ることは無い、然れども天地人の三才が集つて成就した衣食住は天が之を受くるでもなく、地が之を用ふるでもなく、只人のみが之を自由に受用するのである。されば吾等は此天地の大恩を忘れてはならぬ、此天地の大恩に報いるには徳を積んで善い行ひをし、天地の

の誠道を踐まねばならぬ。

田村氏の心掛は只これだけである。此心掛が氏をして今日あらしめたのである。果して然れば吾人が貧を免るゝの道は別にない、天地間に充滿せる佛の大悲を喜び感謝の心を以て萬物に對し、誠心を以て報恩の行ひをするにある。かくすれば貧を免るゝことが出来るのみでない、貧其物が宇宙の間に無くなつてしまふ。

五、金錢と道徳の並行 世間の人は金さへあれば何が無くとも大丈夫と考へて居る人が多い、これが大なる迷ひである。金のあるのは大丈夫どころではない、實に危険なるものである。吾等の如き不徳の者には、金は無いのが却て安全である。

田村又吉氏が明治廿五年に農事改良の目的を以て視察かたゞ地方を巡回して静岡縣駿河國庵原郡杉山村の片平信明氏を訪問した。此片平氏は私財を抛つて杉山村の荒廢を恢復した君子人であるから、田村氏は自分の稻取村に施した改良のことを話し、村の資財

の増加したことを告げて助言を求めると、片平氏の言はるゝに、それは甚だ危い仕方である、金ばかり積んで徳を積まぬのは、馬や車の荷物を片方へばかり積むやうなもので、顛覆の虞れがある。氣をつけぬと飛んでも無いことになるぞと言はれた。

實にこれは明言である。吾人が聞く所によれば栃木縣の某寒村では蒟蒻コンニャクの栽培を盛んにして之を賣り出した所が、適し蒟蒻の價が高くて村民は俄かに資産を増して内福になつた。すると彼等は忽ち贅澤をし始めて何れの家でも菰樽ミヅヅを立て置いて酒を飲み、妾を畜へたり三味線を弾いたり、賭博をしたり、茶屋遊びをしたりするやうになつた、然るに一朝にして蒟蒻の價が下落して收支償はぬやうになつたから村民は已前にも倍して貧乏と爲つた。それでも贅澤と淫風とは身に染みて止めることが出来ぬから謂ふべからざる悲況に沈んだといふ。されば金銀は之を使用するだけの徳行が無ければ必ず却て人の身を減ぼす、富家の子弟が身を持崩もろくづして一生を埋没し去るはこれ

れが爲である。

田村氏は片平氏の一言に大いに感じて故郷稻取村へ還るや否や、羽織や袴を焼き捨て、村長といふやうな顔つきをせず、眞の勞働者のやうに謙遜卑下し、一方には村民の善行を獎勵して、救護社を設立したり、夜學校を起したり、母の會、處女の會、耆老會などを設けて智徳を磨かしめ資財と徳行との並立するやうに盡力せられたのである。

六、紙衣の十徳 故に吾等の如き薄福少徳の者にあつては貧なるこそ何よりの幸なれと感念して佛祖の恩と祖先の恩の大なるを喜ぶ外はないと思ふ。

昔し釋守一は平生紙衣を身に纏うて居たが、少しも不足と思はざるのみか却て紙衣の十徳を列擧して喜んでゐた。其十徳といふは一には求め易く憂なし、二には盜賊の怖れなし、三には名利の念を離る、四には寒を防ぎ風を遮る、五には洗濯の煩ひ無し、六に

は蚤虱住せず、七には執着の念を離る、八には起居自ら静なり、九には他の羨望を絶す、十には行法を勵むの媒と爲る。これが紙衣の十徳である。

守一の如き心操があつたなら吾人も法喜禪悦の一生を送ることが出来るやう。面山和尚も枯淡なる生涯に甘んじて、其偶成の偈に

麥足不食盧陵米

泉甘何羨趙州茶

庵前老松似龍屈

時笑世人惶爪牙

とある、何と面白い機用でないか。

七、安心は人生第一の寶、貝原益軒の友人に風竹散人といふ人があつて常に申した語に

富に三等あり、邸宅宏麗にして資財殷充なるは家の富なり、四肢健康にして耳目聰明なるは身の富なり、廣く古今を知り旁く物理に通ずるは心の富なり

とあるが、這は貝原氏も稱賛された通り前に金言である。邸宅が立

派で、其中に金銀珠玉が澤山あつても、开は家の寶で身の寶でないから、身體が虚弱で絶えず、苦い藥を飲んで青い顔をして居るやうでは家の富があつても役にたゝぬ。又邸宅も立派で、金銀もあり、其上に身體が壯健なれば結構ではあるが、心の富が無くて無學文盲では人間の價値が無ければかりか、心中に樂みとする所が無い。故に吾人は心の富、即ち物理を知り、古今に通ずるの寶を得ねばならぬ。されど心の富ばかりで、其身は病氣に苦しめられ、且つ資財にも乏しく飢渴に迫るやうでは幸福とは言はれぬ、又心の富と身の富とを兼有して物の道理も知り、身體も強健であるとしても、家に半文錢の貯へも無いとしたら、餘り結構な身分とは言はれぬ。更に一步を進めて之を考ふれば心に古今の理を明らめ、身に毫髮の病も無く、家には鉅萬の富を有して、風竹散人の所謂三等の富を悉く得たりとするも、若し心に愛ふる所があつては何にもならぬ。然れば心に愛の無い程善い事はないのである。

是を以て吾人は宗教的修養の結果、所有心の憂を去つて萬事に當つて精神の喜びを失はぬやうにするが何より大切である。此萬事に當つて精神の喜びを失はぬ安心は實に人生第一の寶である。此安心の寶があつたなら自然と身體も壯健になる、世に安心程身の養生になるものは無い、身體が壯健になれば勉強して金を貯蓄する事もでき、學問して理を明むる事もできる。故に安心は風竹散人の所謂三等の富の大本である。人生に之に勝る寶は無い。

八、武公の知足 水戸の武公が始めて水戸家を相續なされた最初の正月、御目出度き祝ひの食膳につかれた時、如何なる膳部方の危忽か、汁碗に汁が盛つて無かつた。若し此時に武公が御怒りなされたら、二人や三人は割腹せねばならぬ程の失禮であつた。然るに武公は少しも御怒りが無く、從容として

汁一つなくとも飯は食へるなり

足らぬを物の始めとはして



と仰せられたので、臣等一同愁眉を開いた。此寛仁なる振舞を紀州公が御聞きなされて

汗一つ無くとも飯は食へるこそ

よろづ事足る始めなりけれ

と遊ばして歌を御送りになつて、御祝ひなされたと申すことである。何不自由なき大名でさへ斯く御謹みなされたものである。然れば吾々の如き者共が、汗が無いの菜が不甘いのと不足を言うてはならぬ。元來吾々が一汗一菜の食事でも受けるだけの働きをして居るか、否か、何の爲す事も無く、何の徳も無くて佛の恩を受け祖先の恩を受けて安閑として衣食しつゝあるは勿體ないことでないか。一粒の米でも七十二通りの手数を經ねば白米にはならぬとある、其白米を空しく食ひ潰してゐるは實に耻かしい事である。

九、仙崖和尚の洒落 博多の聖福寺の仙崖和尚は故郷の美濃の國で一寺に住して居つたが、事あつて其寺を追放せられた時、傘一本で

飄然として門を出た、

傘をひろげて見ればあまが下

身はぬるゝともみのはたのまじ

と口吟したさうである。和尚のやうな境界となれば貧富によつて喜憂を爲すことはないであらう。吾人の見解に依れば貧しきも富めるも多くの差別は無い、何となれば如何に富みたりとて其受くる所の富の分量は貧しきものと大差は無い。如何に富みたりとて食物は胃袋一ぱいに限る、洋食の五十皿も一度に食ひ、シャンペン酒の百瓶も一度に平げる譯にゆかぬ。衣服とても其通り、如何に富豪の紳士ぢやとて洋服を五著も八著も一度に身につける事はできぬ、又如何に富裕でも帽子を二十も三十も被つたり、靴を百足も二百足も一廻に穿くことはできぬ。やはり衣服は一領、帽子は一つ、靴は一對に限つて居る。して見れば貧民ぢやとて胃袋一ぱいに食ひ、一足の靴を穿き、一つの帽子は被つてゐる。只富める人と貧しい人の相違は

前者は餘分な無要の物を多く持つてゐるが、後者はそれが無い點にある。日本の富豪たる三井や岩崎には鉅萬の金があるであらう。併し其鉅萬の金を主人が一身に受け用ひて居るのではない。皆人に借したり、他人の必要な物品として他人に使用させて置くので、自ら受用する所は、吾人と大差は無い。米國にはスタンダード石油會社のやうに百二十四億圓も資産を持つた富豪がある、併し此石油王ロッキンフェラー氏でも吾人でも石油を使用する上には大差はない、ロッキンフェラー氏でも石油を何萬斛も一度に使用したり、又石油を酒の代りに飲むともできぬ。又米國大鐵道の二分の一を所有する程の大富豪があるとしても、其鐵道を一身に受用する上に於ては、やはり一人分より外に乗り様はない、吾人の如き貧乏人も一人分の乗車をする。されば鐵道王も吾人も此點に於て大差は無い。又カーネギーの如き鋼鐵王と言はるる富豪も鋼鐵を如何に多く所有して居ても、之を食ふことも、飲むことも、衣ることもできぬ。畢竟自分一身には

無要なる鐵を多く持つてゐて、他人の用に供するのである。カアネ  
ギイの如きは自己の有する金の使用法にさへ窮して居る。吾人は幸  
にして使用に窮するやうな巨額の金を持つて居らぬ。これ天祐の一  
であると思ふ。 *解し望は貧乏人の心は惜しみである*  
十、家貧占力量 陸放翁の句に *貧は富の影*  
家貧占力量 夜夢驗工夫 *正業知 足るを以て事*  
とあるから貧なれば遣は自己の力量を試験せらるゝことと心得て大  
いに奮勵するを要する。汪信民は *身亦り*  
人常咬得菜根則百事可做

と明言して貧の爲めに屈せざる意氣を示し、山鹿素行は  
有非無田貧亦極 纒支伏臘意悠々  
平生不作皺眉事 直以百年當一遊  
と吟じて貧中の樂みを歌ひ、又

天空海闊小茅堂 四序悠々春色長

笑殺淵明無卓識

北寇何必慕穰皇

と豪語してゐる。されば安東省庵も言へる如く

無求是至貴 知足是至富 安心是至樂

に相違ないのである。また鈍通居士の云く

悪人に福あり善人に貧乏あるは皆前世の果報なり、若しこれを天命なりと計り謂はば、善人に貧乏させて苦しませるは、天道も有甲斐なしと謂つべし、只能く貧學を勤め、彼の隻手音聲を悟り、貧苦するとも天をも恨みず、人をも咎めず、必ず欲心を起して天命を害ふべからず、いかなる貧者たりとも、生涯を持つ程の財資は天から授けてあるもの也、之を天祿といふ。分限相應に着物をきて、餓くないやうに食つて、生きてゐて、そしてゴロリと死んでさへ仕舞へば、娑婆の役目は相済むなり、餘りむづかしくもないことに欲をかなく故、苦勞ができてむづかしくなる也。

鈍通居士の謂ふ處は單純なる消極論で多くの點に於て徹底せざる悟

道であるが、貧に甘んずるの一點に於ては彼の云ふが如くにして宜しからうと思ふ。

## 第二章 病中の妙趣

十一、病中の樂み ショーペンハウエルの語に

疾病に際し或は苦難に際する時は健康平和の日を羨望するも、健康平和を得たる今日にありては今日の幸福を祝せざるは人情の常套なり

とあるが、如何にも其通りで、人は病氣に罹つたり、災難にでも遇ふと頻りに平日無事の時を追想して非常に幸福であつたやうに思ふが、一朝病氣が瘳り、災難が過ぎ去ると、無病息災を何とも思はず、却つて無意味のやうに見消みなしてしまふ。故に斯く我儘なる人間に無病息災の難有味を知らずには時々災難も病氣も必要となるのである。自然界を包攝せる佛陀が吾人に災難と病氣とを下すも此れが爲であらう。世人の多くは健康の幸ひなることだけを心得て、病氣の幸ひなることを知らぬ。これ彼等が病氣に囚はれて之に打勝つて

との出来ぬ重なる原因である。

今寒い風が飄々<sup>ひょうく</sup>と吹くとする、岩や石は一向此寒風に驚かぬ。此寒風が土や木に當るとするも土や木は更に怖るゝ所はない。併し此風が高等動物に當つたら、彼等は皆平降する、殊に人間が肌を斬るやうな寒風に遇へば忽ち感冒<sup>かむ</sup>をひいて病氣となる。今茲に有毒なる微菌があるとす、これが土や石や岩などに附いても彼等は一向平氣である。更にこれが草木に附いても草木も亦何とも感せぬ。又これが豚や犬の膈内に入つたとするも彼等の頑強なる身體は自然に之を殺してしまふ。併しこれが人間の體内に入つたなら、其勢力を逞うして直に大病と爲る。果して然れば天地間の物は高等になればなる程、障害に對する抵抗力が弱くなる。人間の身體は地球上の萬物中最も高等にでき、最も微妙に形成せられてゐるから、最も病氣に罹り易いのである。譬へば同じ金屬にしても鐵の棒のやうな劣等にして簡單なものもあり、懐中時計のやうな高等にして複雑なものもあ

る。劣等なる鐵の棒は容易に壊れぬけれども高等なる時計は些少の障害にも壊れるやうなものである。さりとて劣等なる鐵の棒と爲つた金屬は幸福で、高等なる時計と爲つた金屬は不幸であるとは言はれぬ。否、同じことなら劣等なる鐵の棒と爲つて地面に轉つて居るより高等なる時計となつて人の懷中に住居するが善いに相違ない。それと同じて人間も劣等なる岩石や、草木や、下等動物の身に生れずして兎も角も人間と生れたのは結構である。大いに賀すべきである。草や木の如き劣等生物に生れたら人間のやうな病氣をして見ることができない。さるを人間と生れて高等なる微妙なる體軀を持つことの出来たのは實に冥加の至りである。吾人は此點に於て天地の母たる佛陀に感謝して今日の境涯を喜び樂むのである。

十二、病氣の使命其一 吾人の一生涯中には種々様々に境遇が變化するが、其變化が皆深い意味のあることと思はるゝ。即ち吾人の健康が急に失はれたとすれば、這は吾人に一種特別なる使命が下つた



と信じて、之を成就せんと努めねばならぬ。

米國に青春の一女子があつて先づ結婚する前に世界漫遊を思ひたち、各國を巡遊して印度に來た時に多くの癩病患者が居るので、少しく癩病の研究をして見た。其後歸國して無事に暮してゐたが、ふと身體に一の腫物を生じた、慈恵の醫師に診て貰うと、別に心配する程のことは無いといふ。其儘にして置くと例の腫物は愈増大して來て容易ならぬ症狀であるから、外科醫の診察を乞ふて見ると、これは癩病であるといふ。此醫師の一言は少女を地獄の底へ投げ入れた。少女は泣いて泣いて夜も晝も泣き明した。泣くことを道理なれ、花の盛りの身を以て人交りのできぬ天刑病に取附かれ、生れもつかぬ不具者と爲り、唯思ひべき厭ふべき奥骸を抱いて、苦悶哀痛の中に幾回の春秋を送り迎へするものぞと思へば、此少女程不幸のものは廣い世間に二人とはあるまい。これは彼女が印度で癩病の研究をした時に感染したのである。彼女の運命は

最早定まつた、彼女は泣いた、泣いても何の役にも立たぬ、朋友は彼女を慰めた、慰めても何の効も無い、名醫も彼女を救ふことはできぬ。何人も彼女を救ふべき力が無い。然れば彼女は如何にしたか、泣いて泣きあかした結果、翻然として心を改めた、彼女は自ら思ふやう、妻が身に癩病の傳染したのは神が妻に一の使命を下し給うたのであらう、印度には多くの癩病患者がある、彼等は實に憐むべき兄弟姉妹である、彼等の爲に同情の涙を洒く者が無い、されば神は妻の手を借りて此憐むべき姉妹兄弟の爲に病院を建て彼等を救はんとし給ふのである。いで妻が一身は神の下し給へる此天職に捧げまつらんと決心した。此信仰は健げなる少女を救ふた、最早彼女は暗黒なる地獄の中には居らぬ、赫々たる希望の天國に入りつゝある。少女が小さき胸の中に燃えたる此信仰の光りは即ち佛陀の大光明である。

讀者諸君の中、病める者もあらう、悶えつゝある者もあらう。諸君

を闇く暗黒の中より救ひ、諸君を光榮ある生活に導くものは、親戚にあらず、朋友にあらず、教師にあらず、學問知識にあらず、諸君が内心の奥底に輝く所の良心の光明である。佛陀は常に諸君の良心を通じて諸君に救済の道を教示し給ふことを忘れてはならぬ。

十三、病氣の使命其二　かくて少女は一大決心をして住み馴れたる故郷を見捨て再び印度へ渡航し、東奔西走の結果雪山の下へ一大病院を建立して癩病患者の爲に一個の樂園を形成した。何と難有ことでないか。

若し我國のハイカラ婦人共が此少女と同様の境遇に陥つたなら、必ず首を縊つて青い鼻水を垂すか、さなくば水に溺れて土左衛門といふ男に化る位が關の山であらう。吾人にとつて信仰と修養はと役に立つものは無い、若し此少女にして此信仰が無かつたならば空しく一生を癩病の奴隷と化し去るであつたらう。されば吾等は決して病氣の爲にヘコタレてはならぬ、世の中に數多ある病氣の中に神經に

關係せぬ者は殆んど一つも無い、病氣は心の虚に乗じて入るもの故に、何でも心氣を丹田に満たして元氣を渾身に充實するやうに坐禪するが宜い。

狐が人に憑くと信じて之を恐るゝ人民は狐憑病に罹る、此信仰の無い所には此病も無い。犬が人に憑くと信じて居る人民の間には犬憑がある、狼が人に憑くと信じて居る所には狼の憑く病がある。自分の親は三十歳で死んだから己れも三十歳で死ぬと信じて二十五六歳から死ぬかゝと憂ひ悶えて待つて居れば三十歳で死ぬ。我親は肺病で斃れたから、己れも肺病があるだらう、何と無く息が苦しい咳が出る、痰が喉にからむなどと、何でも無いのに心配してゐると自然と肺病になる。病人は病氣其物で苦しむよりは心配で苦しむのが多い。我家は長命の血統である、祖父母も父母も九十歳以上の高齡を保つた。己れも身體が頑健である、容易に死なぬと信じて病氣も更に氣に掛けぬ人は必ず長命を保つ。

先般我曹洞宗大學に二三の赤痢患者が出来たといふので大騒動をしたことがあつた、警官が来る、検疫醫がくる、消毒人夫が来る、交通遮断をする、生徒の健康診断をする、患者を避病院へ送る、それは、大變な事であつた。

此事件について大學に關係ある人々は皆大學の爲めに災難であるとして之を哀んだ。之に反して吾人は潜かに心の中で悦んでゐた、大學の生徒が赤痢に感染したのは氣の毒であるが、此騒ぎが新聞に掲載せられて世間幾多の學校の寄宿舎や、私宅に居る人々に警戒を興へ、接生を等閑にせぬやうにすれば、曹洞宗大學の二三の生徒を犠牲にして天下の人を赤痢病より救ふ譯になるから、此等の生徒は天下の人に代つて病氣をするも同じで、維摩居士が

一切衆生に病あるが故に我病あり

といふたのと異らぬ。殊に彼等は佛陀の教を身に行ふべき任務ある者共であるから、佛陀は特に彼等に斯の如き使命を下して一切衆生

の爲めに病ましめ給ふと考へたなら、彼等は欣んで病苦に耐へる事ができる。かくして世人が唯災難とのみ思ふ事件の中にも善く考置すれば不思議な意味が発見せられて佛陀の難有あまたいことが知れる。

十四、病氣の使命其三 諸行無常は佛敎の第一に教へる道理であるが、此無常といふ事は一應了解はできるが、眞に無常を感ずるのは容易でない。然り、何人も無常を實地に感じて其日／＼のたしなみを嚴重にして、明日死すとも少しも遺憾は無いやうに安心決定してゐる人は中々見當らぬ。大抵の人は放心あきらして『胡蝶夢中空く春を度る』のである。然るに吾人をして切實に無常を感せしめ、吾人をして眞面目ならしむる者は病氣である。病氣が一たび襲ひ來る時は従前の虛榮心は泡沫の如く散じてしまふ。かくして吾人をして人生の眞趣に悟入するの機會を興ふる者は病氣である。病氣は吾人が之に囚はれさせねば種々なる福音を携へ來る。第一吾人の輕浮なる心を除き、第二將來の爲に慮るの注意を増し、第三に他人の病苦に同

情せしめ、第四に殺生の心を去り、第五に人情の淺深を知らしめ、第六に人生の秘密を觀破せしめ、第七に深く天命に感悟する所あらしめ、第八に宗教心を興起せしむる。

十五、病氣の使命其四 且つ病氣が意外なる好果を奏することがある。朝永三十郎君の話に、

批評哲學の大家であるカントとロックといふ二人は、哲學者中屈指の瘦せ黨である。カントは學者としての活動では古今に喟つた學者であり、殊に批判哲學といふ點に於ては古今獨歩といふて差支ない人であるけれども、身體の方の活動は餘り振つて居らぬ。人相から言ふても貧相で、輪廓が非常に狭くて薄べらな人である。旅行が嫌ひで獨乙の東北の隅のコーンヒッスベルヒと云ふ小さな市の生れであります。容易に其市を出たことが無く、そして其市のある州の外には一生一遍も出たことは無かつたと云ふ程の出無精であります。それで非常に現則正しい、用愼深い、即ち批判

的な生活を送つて——カントの規則正しかつた一例は、カントは  
 晨起就寝散歩などの時間をばキチンと極めて置いて嚴格に之を實  
 行してゐたからコエーニッヒスベルヒの市民はカントの散歩によ  
 つて時間を知ることができたといふ話がある。コエーニッヒス  
 ベルヒの御寺の大時計の針よりもカントの外出の方が却て正確で  
 あつたと云ふ話がある。さういふ批判的の生活を送つて學問上  
 では不朽の功業を立て八十歳の高齡を以て歿したのである。それ  
 で私は斯ういふ風に考へた。若しカントが血氣が盛んで旅行も好  
 き狩獵も好き、酒も飲めば玉突もやると云ふやうな、ピン／＼し  
 た人であつたならば、逆もあの三大批判書を書くことはできなかつたであらう。詰り痩せ黨であつたから、ア、いふ風の仕事ができ  
 きたのであるといふやうに考へたのである。  
 それから痩せ黨哲學者の第二人であるロックは尙ほ甚しい。これ  
 は私共より尙ほ氣の毒なのである。即ち若い時から喘息で肺病で

あつた。此人はカントと異つて書齋の中にシツ込んで本ばかりいぢくつて居るといふ側では無く、中々の活學者である。非常な慷慨家で、愛國家で所謂志士といふ様な風格の人であつた。當時の王家の壓制に反抗して、謀反の嫌疑を以て探偵などに附け回はされ、當時志士の避難所であつた和蘭に逃れ、彼の一六八八年の革命、即ちオーレンヤのキリアム、の英國上陸の事に參與し、英國が今日の様な立派な立憲政體の國となるには此人の力も大いに興つて力があつたのである。併し其身を處することはカントと等しく非常に細慎で、非常に接生に注意し、又其探偵に附け回はされた時などは用慎に用慎を重ねて極度の沈黙を守り、流石の探偵も之を捕縛する口實が無くて弱らされたといふ實話があります。兎に角ロツクも亦こんな批判的な生活を送つて七十二歳の高齡に達し、學問界には偉大なる功業を立て居るのである。

「トして、も瘦せた人は一般に神経質である、従つて放膽でなくて

小心である、萬事が批判的である、従つて其性格が學風に現はれて其學説までが批判的になつてくるのである。神経質といふ事は善い事ではない、缺點である。併しこれも利用の仕方によつては大いに役に立つことがある。無論極端になつては困るのであるが或程度までは随分之を利用して神経質でない人では到底できないやうな功業を立てることもできるのである。

私は斯ういふ様な考ひで、瘦せ黨には瘦せ黨相應な、否、瘦せ黨でなければ出来ないといふ様な仕事があるのであると思つて幾分人意を強うすることを得るのであります。矢張人を羨んだり、自分を悲觀したりせず、自分の個性に満足して、自分の個性に依頼して、或は更に進んで自分の個性を尊重して、其個性相應なことを一生懸命にやらねばならんといふ様な考を起して、前に述べた様な心細い心持を迫ひ拂つて居るのであります。

如何にも朝永氏の言はるゝ如く、カントは神経質の人で戶外散歩の

時には人と話しをせぬ、又は話しをすれば口を開く、口を開けば外氣と共に塵埃が咽に入つて害があると考へたからである。斯の如き神髄質なる、即ち半病人であつたから、認識論上に大功を樹てるやうな、省察ができたのである。ロックも其通り肺病であつて内省的なる精神傾向を持つてゐたればこそ學者となつた。果して然れば彼等の病氣は彼等をして學界に貢献せしめたる一大恩恵で世界の人々に對しても彼等の病氣は一大恩恵なるは謂ふ迄も無からう。加之病身なればこそ接生に細慎なる注意を加へてカントは八十歳、ロックは七十二歳の天壽を全うしたとすれば病身の恩恵も亦大なる哉と言はねばならぬ。

十六、病氣の使命其五 進化論の泰斗チャールズ、マルティンもカントやロックの様な虚弱な人であつた。渡瀬庄三郎君の語しに、マルティンの一代の大半は病に苦められ、時としては數週乃至數月の間も空しく病床の上は日を送つたこともあり、この累は年

の傾くと共にますます繁くなつた。實にその歸朝後四十年の生涯は殆ど一日として常人の健康の樂を享けたことなく、断えず痲疾と疲勞とに對して苦しき健闘を持續して居たのであるが、あまり圓滿な幸福は卻て何人の事業にも好結果を生せぬものであるとはマルティンが友人にも告げた説であつたから、この疾病も實は塞翁の馬で、大いにその一代の成功に關係があつたかも知れぬのである。これが爲にマルティンは規律ある生活を營み、周到なる用意を以て日々の課程を定めた。その最も輕快な時の日課は午前八時から九時半までと、同十時半から十二時十五分までと、午後四時半から六時までと、朝晝夜の三度に時間を限つて、この間を通信研究著作に當て、その餘暇には散歩し、或は長椅子に身を横へて休養し、時には傍で妻に小説を讀で貰つてそれを聴いて慰として居つたのである。その執務法の最も特徴と認められた點は極めて時を貴重することであつた。マルティンが一日の中でそ



の研究著述に適用し得べき時間は、實に僅少なものであつたのに  
 鴻大なる事業を成し遂げることを得たのは時を貴重し、超絶した  
 勢力を問題の要點に向けて集中する其能力に依つたのであつた。  
 熱鬧な都市の繁劇な生活に堪へず、遂に閑靜な地に卜居すること  
 になつた後も、病を養ふが爲に生涯規律的生活を守らねばならぬ  
 身と爲つたのであるから、ダアルツイン一代の功業の眞價を理會  
 するには、その一生の大半が断えず病魔の呵責を免れ得なかつた  
 といふ事實を決して念頭より失ふてはならぬのである  
 と言ふてゐる。かく稀世の大學者たり世界の恩師たるダアルツイン  
 は病身であつて絶えず神經衰弱に苦しみ、頑固なる頭痛と戦つて規  
 則正しき生活をした爲め、大なる鴻業を成就したのみでなく千八百  
 八十二年四月十九日に七十三歳の高齡を以て歿した。思ふに彼の病  
 身は彼を警戒して生活に規律あらしめ、課業に忠實ならしめ、遂に彼  
 をして大創見家たらしめた。病患の使命は實に不可思議な者である。

十七、神經の身體に及ぼす影響 斯く論ずればとて吾人は病氣を好  
 んで求むる様に人に變めるのではない、病氣にヘコマレてしまつて  
 はならぬ、病氣の身にあるを忘れるやうに心掛るが好いと云ふので  
 ある。假令重病に罹ればとて天を怨みず、人を咎めず、何處迄も佛  
 陀の『慈念視衆生』の福音を忘れずして法喜禪悅の生活を送る時は  
 吾人は病によつて卻て多くの利益を得ること疑ひない。  
 吾人の精神が身體に及ぼす影響は實に非常なものである、  
 或米國の醫師は公言した、病氣の治療は患者が醫師を見る瞬間か  
 ら始まると。  
 如何にも其通りで病苦に呻いて居る患者も醫者が来てくれると地獄  
 で佛に逢うたやうに喜ぶ、そこで最早癒るといふ觀念を得るから病  
 勢を壓伏して快方へ向ふのである。

予が郷里に龜久保と名くる大字がある、此處に産科の名醫があつ  
 たが、此醫者は非常に患者が多いので往診には馬に騎つて奔るを

常とした。而して如何に難産でも安すくと子を擧げしめると云ふので、産家から醫者を喚びにやつて、醫者が馬で來ると、産婦は馬の足音を聞いた丈で直に子を生み落すのが幾人もあつた。これ産婦が醫者の來たのを見て今迄の恐怖心が一度に去つて安くと子が生れるものと信するから、醫者が手を下さぬ先きに生れるのである。

十八 神經と身體の關係 さすれば觀念が身體に及ぼす勢力は實に恐るべきものがある、例せば、

千八百八十三年に和蘭の國で國事犯で捕縛されたフアメイドと名くる男があつた。此男は當時三十七歳の壯年で體量は百五十四ポンドもあつて充分健康であつたから、其身體に就て觀念の肉體に及ぼす勢力を試験して見やうといふので、醫科大學長が、フアメイドを訪ふて欺いて云ふやう、足下は國事犯で最早死刑の宣告を受けてゐる、然れば何れにしても生命は無いのであるから、足下

の身體を吾等に貸して學問上の試験に供して貰ひたい、并は別儀では無い、學者社會に人間の血液に就て二つの異説がある。一つは人間の血液は體量の十分の一以上あるといふ學説と、一つは十分の一以下であるといふ學説で、我國の學者は十分の一已上の説を主張し、英佛の學者は十分の一已下の説を固守してゐる。併しこれは一たび健康の人から血液を絞り取つて試験をして見ねば充分の論證ができぬ。就ては足下は國事犯で國の爲に一命を捨てたものであるから、何卒國の爲に此試験の犠牲になつて死んでくれまいか、血液は痛く無い様に絞り取るから決して苦しいことは無い、如何であらうといふと、フアメイドは暫く思案して、決心したと見えて、宜しい、學問の爲に此身を捨てやうと答へた。そこで其年の七月廿日に同人を死刑臺に上せ、眼を塞いで見えないやうにし、足の十指にナイフで傷をつけ、此處から血を絞り取ると公言して恰も血液が滴り落ちるやうに水を滴らして一滴一滴足下の

器に入る音をさせ、一時間二時間と次第に滴下したる水量を計つて今は何ポンド滴つた、又何ポンド滴つたと大聲に唱へて本人に聞かせ、五時間の後に十八ポンド滴つた、最早全體量の百分の十以上に達した、我國の學者の説が勝利を得たとて萬歳を唱へ、本人を檢案して見ると全く死んでゐた。

これファメードの身體には何も死ぬ程の病氣も、傷害も無いのであるが、血液を絞り取られて死ぬものと確信して時々刻々血液は滴り下ると感じつゝ、五時間の長い間、絶えず死に往きつゝあると思つた結果は全く死んだのである。佛説に思食といふことがあるが、これは今の例の反對で觀念が食物と爲つて食はずして長く生命を保つことである。

餓饑の時に親が子供に食はする物が無いので、一つの袋を吊して置いて其中に食物があるから、親の留守に食事がしたくば袋を人に卸して貰うて食へといふて小供等を欺いて親は餘處へ往つて死

んでしまつた。  
小供等は餓ゑて／＼苦いけれども袋を眺めて彼の中に食物があるからと思つて長く死なずに居た。其中に他より大人が來たから小供等は件の袋を卸して貰うて中を見ると何も無いので、其儘死んでしまつた。

道は小供等の希望が食となつて長く生きて居たのである。

十九、病氣と自己暗示其一 上述の如く吾人の觀念は身體に對して利益をも與へ又損害をも與へ得る者であるから、吾人は努めて有害なる觀念を去つて有益なる觀念を持たねばならぬ、道は病人にあつては特に必要である。米人ウルスマー氏の談に依れば

米國の一婦人は醫書を読んで見ると、其中に人が談話に困難を感じたり、早く言語を發することのできぬのは中風の一兆候であると記してあつた。すると婦人は間もなく自ら中風に罹りはせぬかと心配して、實際に言葉が早く出なくなり、談話に困難を覺え始

めた。そこで醫者が診察して見たが、一向に中風などの起りさうにもない、然し婦人は非常に心痛して愈々言語が充分に出なくなつた。これ全く自己暗示の結果であるから、醫師の注意によつて間もなく矯正せられた。

又或神経質の男は不眠症にかゝつて、毎夜安眠劑を服して眠る習慣であつた。そこでウルヌター氏は其安眠劑なる者を檢したるに容易に溶解せぬ藥材であるから、其男に向て此安眠劑を用ひて何時間後に其機能が現はれるかと問ふと、服藥後五分乃至十分の後には効が現はれると言ふた。然れども其藥材は五分や十分で溶解せぬ物であるから、藥力で安眠するのではなく、自己暗示に由て安眠することを發見した。

佛國の醫師テ、グラーグ氏は自己暗示の力で疲勞を減じたり、脚部の冷却を療したとを記載してゐる。

故に病氣には服藥を怠つてはならぬけれども精神的なる療法も亦決

して等閑にしてはならぬ。殊に神経に關する諸症の如きは精神療法が最も有効である。

二十、病氣と自己暗示其二 更に他の一例を擧げて見やう、

深川の木場の材木問屋に白木屋といふがあつた。此白木屋の一人の大切な娘が大病で、さまざま手を盡して療治をして見たが驗がない。醫者も最早藥の盛り様が無いと懸子を投げて、息を引取るのを待つばかりになつた。この上は神佛の力に頼るより外に致方が無いと云ふので、急飛脚をたて、鎌倉圓覺寺の誠拙禪師を迎へに來た。やれ／＼それは氣の毒なことぢやと云ふので、直に駕に乗つて來られたから、主人は泣きながら娘の病氣の始終を話して、何卒助かるやうに、有難い御經を讀んで下されと頼む。禪師はよし／＼何でも讀んで進せやう、然し、御布施は少し多分に前金で貰いたい、老祿は後金と云ふのは大嫌ひだ。主人、それは一人娘のことですから、助かることなら身代半分を御布施に差上

ても大事御座らぬといふ。禪師、それでは金百兩と米百俵を申受たい。主人、これは少し多過ると思へども、身代半分差上ても宜いと云ふた廉があるから、それは高い、少々まけて下さいとも言はれぬ、承知の由を答へた。禪師、それでは其金と米を急に鎌倉へ人夫を仕立て送つて呉れと言ひすて、すつと佛間に入つて般若心經を口の中でブツ／＼誦じて居られたが、頓て娘の寐て居る枕上に来て、御前も此大家の一人娘と生れて來ながら、其榮華も受けないうで死ぬかい、氣の毒のことぢや。定命と言ふものは神でも佛でも逃れ様はない、お前も定命で死ぬのぢやから、誰を恨ることも無いぢや。然しながらお前は仕合者ぢやぞや。今老衲は御布施に金百兩と米百俵を貰うた。これは直に鎌倉へ送つたが外の事に使うのではないので、僧堂に居る若い坊主共に食はすのぢや。僧堂には五六十人も居るが、この中に五人や六人は儲かに眞の佛に成る者がある。然ればお前は佛と縁を結んだと言ふものぢや。

難有ではないか、安心して死ぬ／＼、御前は仕合者ぢや／＼と言ひすて、病室を出て、老衲はこれから増上寺へ遊びに行つて來るとて、ノイと白木屋を出られた。あとで主人は大不平、折角大枚の金と米を費やしなから、娘病氣平癒の祈禱もして呉れずして、却て死ぬ／＼とは何事だと、こぼして居たが、それにひきかへて娘の方は鍼拙禪師の垂示を得てからと云ふものは、大安心を得たものと見えて、前の如く病苦にも惱まない。その晩も六つかしいと思つた大病人が死なぬ、二日三日と過ぎて、遂に夢の覺めたやうに治つたといふことぢや。

これ鍼拙和尚の垂示に由つて娘が最早死んでも善いと、安心し仕合者ぢやと思つて病氣を苦にせぬやうに爲つた故、平癒の方へ向つたのである。世の中に安心ほどの養生になるものは斷じて無い。されば病氣の人は勿論、健康の人々も一刻も速く此安心決定をするが肝要である。

第三章 不幸中の妙趣

二十一、先づ佛心を知れ。吾人は兎角幸福には喜び不幸には泣き、得意の時には肩で風を切り、失意の時には青菜に鹽をかけたやうになる、斯る浅ましき生涯を送るは自ら好んでする譯ではないが、自己の修行が足らず、信仰の何たるかも辨へぬからである。されば幸福にも欣々然、不幸にも欣々然、何事につけても愉快に一生を暮さうと思はゞ須く佛の心を明むべきである。佛とは如何なるものか、佛とは吾等に此身體を興へ給へるもの、吾等に此心を給へる者、吾等に此生命を興へ給へる者、吾等に衣食住を興へ給へる者、吾等に父母妻子、朋友親戚を興へ給へる者である。

地球の歴史を追踪すれば其太古には所謂無生物のみであつた。然るに其間に生物は発生したのである。然れども無生物から生物ができる譯は無い、種子の無い處に果實のなる筈はない、されば所謂無生

物は元來生物なのである。果して然れば天下に生物ならざる者は一つもない。宇宙の萬象は一大生物の現れである。故に吾人の耳目に觸るゝ所の現象は一大生命を有する實在の露現で、其變化は無限なる生命の循環に外ならぬ。佛は此限り無き大生命であるから、無量壽とも名けてある。涅槃經には

如阿耨達池、出四大河、如來亦爾、出一切生命。

とあつて阿耨達池と稱する池より四つの大河が流れ出る如く、佛よりは一切の生命が出ると示してある。太古に地球上に劣等なる生物が発生してそれから次第に高等なる生物ができたのは、生命の向上であつて、魚族のやうな劣等なる有脊推動物も遂に進化して哺乳類の如きものと爲り、其哺乳類の中に最後に人類の發生を見たのである。さすれば吾等人類の高等なる生命は元來佛の生命より出たもので、最も尊重すべき者たるは謂ふ迄も無からう。

此貴重なるを生命は身と心との存在に依つて維持せられつゝある。

而して生命が全宇宙に現はれつゝある如く、此身と心とも亦全宇宙に亘りて存在する。人間に身と心とがあるのみで無く、動物にも身と心とがあり、植物にも身と心とがあり、金石にも身と心とがある。但し吾等の身と心とは非常に複雑であるが、植物や金石の身と心とは簡短である。之に由て是を見れば宇宙の萬象は限り無き心ある實在の露現なることが知れる。吾等の所謂佛なる者は此廣大無邊なる心である。首楞嚴經に

山河虛空大地咸是妙明真心中物

とある。また圓覺經にも

一切衆生種々幻化皆生於如來圓覺妙心中

と示してある。斯く吾等の心も、生命も皆如來即ち佛より出でたものであれば吾等の身體が佛の賜なるは論ずる迄もなく明かである。

故に佛は吾等の親にして吾等は其子であるから、法華經にも

舍利弗如來亦復如是則爲一切世間之父

とあり、また

此諸衆生皆是我子

一切衆生皆是吾子

と示してあるのである。既に吾等は佛子であるから、佛は慈眼を以て吾等を見給ひ、恰も父母の愛兒を見るが如くにし給ふ、涅槃經に

如來視一切衆生同於一子

とある、洵に難有ことでないか。

加之、吾等人間の發生せぬ先きから、米もあり麥もありて食物として供へられ、麻もあり、綿もありて衣服の材料として與へられ、松もあり、杉もありて家屋の材として給せられ、石炭もあり、石油もあり、電氣もあり、ガスもあり、皆吾等の用を辨するやうに供給せられてある。故に吾人にして少しく手足を使用すれば眞に此等の寶庫を開いて其中の寶を受用することができる。佛は吾等の父母であるから、能く斯の如き無限の寶藏を開いて吾等を恵み給ふのである。

是の如く佛の大慈大悲の心が我身に泌みて感せられたなら不幸の中に居て幸福である、否、不幸といふは全く無くなつてしまふ。

二十二、釋慧嵐の悟道 今一例を舉げて不幸の妙趣を説明して見やう。

支那に釋慧嵐といふ僧があつたが、頗る人生の妙味を悟つて、山中に入つて心静かに坐禪をしてゐた。すると其山の鬼神が之を見て慧嵐の荒膽を挫いてくれやうと思つた。併し慧嵐は悟道の知識で容易に物に驚くやうな人物でないに依つて、何とかして彼を驚かして見やうと工夫し、到底、平凡大抵のことではいけぬ、一つ怪物と化して見やうと思ひ、頭の無い鬼と爲つて慧嵐の面前に現れた。すると慧嵐は之を見て、如何にも面白い怪物ぢや、頭が無いから定めて頭痛がせぬで宜しからうと云うた。鬼神は之を覩て大いに狼狽し、今度こそはと、腹の無い怪物に爲つて現れた。すると慧嵐は一向平氣で、此怪物には腹が無い、定めて腹が立たぬで

宜しからうと云ふた。是に於て鬼神も大いに残念がつて、有らんなりの神力を盡して、種々異様なる怪物と爲つて現れたが、慧嵐は平氣であるので、鬼神の方で驚いて逃げ去つたさうである。

此話には非常なる深い意味があると思ふ。世間の人は常に怪物に襲れてゐる、生れながらにして眼なき者は無眼の怪物に襲はれ、生れながらにして耳なきものは無耳の怪物に襲はれ、足を失へる者は無足の怪物に襲はれ、手を失へる者は無手の怪物に襲はれ、病める者は病障に襲はれ、貧き者は貧神に襲はれ、妻を喪へる者は無妻の怪物に襲はれ、子を失へる者は無子の怪物に襲はれて、日夜に其呵責の手を脱することができぬ。

眼なくして物の色を見分ることのできぬは不幸であるが、これが却て物の眞理を見分る助けとなる。米國の一少女ケルレルの著したる樂天主義と題する書に、

妻は盲目ではあるが、神が妻に肉眼を與へ給はぬのは妻の爲に幸



と思ふ。开はバアクレイ氏も謂へる如く、肉眼は事物の真相を見ることは出来ぬ。動かぬ太陽を動くやうに見たり、小さな月を星より大きいやうに見て居るは眼である。神は是の如き不完全なる肉眼を妾に授け給はずして、心眼を與へ給ふと云うて居る。盲目の人が兩眼ある人を羨み妬み、我身の不幸を哀み咒ひ、煩ひ惱みて一生を空くするも、詮する所、何の益も無い。之に反して肉眼なきが爲に美しき色に心を亂さず、眼に諸の不浄を見て心を汚さず、本心清淨の徳を完うすることの出来るを喜ぶ時は眼なきは却て眼あるより幸福にして佛の慈悲は有眼の人にのみ及ぶのではないことが知れやう。

瑞保己一が夜講の時、風の爲に燈火が消えた。是に於て門弟等が、師匠、何卒燈火をつけるまで、講義を待ち給へと云へば、保己一笑つて、目明といふ者は不自由なものぢやといはれた。さすれば盲目ぢやとて決して憂ふるに及ばぬ瑞保己一は盲目の爲に

記憶力強く、記憶力強き爲に、大學者と爲つた、彼の大學者と爲つたのは盲目の賜である。

予の知れる一人の男は醬油製造の職工であつたが、不品行の爲に人力車夫と爲り、梅毒で兩眼共に見えなく爲つたが、今日では盲目の爲に按摩を業としてゐるが、以前に車夫をしてゐた時より却て立派に暮してゐる。

若し彼をして盲目ならしめなかつたなら、恐くは不品行の爲に今頃は監獄にゐるか若くは死んでゐたであらうと思ふ。然れば彼が今日あるは實に盲目の賜である。慧巖が頭が無ければ頭痛がせぬで宜いと云ふたのは意味ある語でないか。

二十三、不具者の樂み 又世間には耳の聞えぬ人もあり、口のきけぬ人もあり、手の不自由な人もあり、脚の動かぬ人もある。此等の人々が自己の不具を耻ぢ、親を恨み、人を妬み、自ら苦んでも何の役にも立たぬ。耳の聞えぬ人は他人の悪口の耳に入らざるを欣び、

虚言や諂ひの語を聞かぬを樂みとするがよい。聖人の教は耳から入るものでない、身に行うて始めて其眞味が感せられる者である。口のきけぬ者は人の悪口を言はぬを喜び、不言實行を文字通りに履修することの出来るは何より結構と謂はねばならぬ。口は禍の門であるから口のきけぬは禍に遠かるので、佛の慈悲の致す所と思ふがよい。手の不自由な人は餘り手が自由過ぎて人の物を取るより結構な身分と言はねばならぬ。

予の知れる一人の男は貧民であつたが、兵役に服して日露戦争に出で、敵彈の爲に左の手を失つた。其れが爲に終身年金を與へられ、且つ右の手一つで文字を書し、裁判所の書記をして生活し、今では非常に安樂に暮してゐる。

若し此男が左の手を失はなかつたなら、元の通りの貧民で一生を送つたかも知れぬ。彼の今日あるに至れるは手を失つた賜であると言はねばならぬ。脚の不自由な人も其通りで決して其境遇を哀むには

及ばぬ、足の達者な人の如く八方を歩み廻つて空しく金錢を費したり、危険な道路を跋涉して大事の一命を危くするやうなことが無く、結構である。且つ脚が不自由なれば多くは手工に巧みになるから却て一身の幸福となる。世には足が自由過ぎて足で文字を書いたり、足で藝をしたりして、爲に一生見世物師の太夫さんと爲つて憐れな最後を遂る人がある。故に足の不自由な人は足の自由過ぎる人より遙に安全であると言はねばならぬ。要するに人の幸福も不幸も耳目鼻口や手足などの有無に由て定まるものでない。人の境遇や、境遇の變化には不思議な意味のあるもの故、是によつて喜愛を爲すは愚なことである。人間の身體には動物の身體の如く毛皮が無い、そこで衣服を作るの煩ひがある。併し人間には毛皮が無いのが幸である、何となれば寒さ熱さに従つて衣服を厚くしたり薄くしたり一日の間にも自由に幾度も變更することが出来る。動物の毛皮は寒暑に従て厚薄があるけれども、毎日取替たり、洗濯したりすることはできぬ。

又平生用の毛皮と他出用の毛皮と區別することも出来ぬ。また人間には動物の如く敵を防ぐ牙もなく爪もなく、角もない。是に於て乎刀劍を製し、弓矢を作り、銃砲を發明した。軍艦も、潜航艇も、水雷も、此が爲に發明せられた。また人間には羽翼が無い、此が爲に羽翼より速かなる汽車を作り、汽船を造り、電信を發明し、無線電信を發明し、飛行船まで發明した。これ一に人間に羽翼なきの賜である。斯様に考れば天下の事一として欣ばしからざるはなく、深大なる意味を有せざる事は無い。

二十四、天橋立股目鏡 華嚴經に、

若人欲了知三世一切佛 應觀法界性 一切唯心造

とある通り、世間萬般の事皆我心の置き所によつて幸も災と爲り、災も幸となる。

予は昨年の夏、丹後の天橋立の風光を一見せんと志して、舞鶴から船に乗て宮津へ着し、それから小舟を備うて天の橋立を見物に

いつた。天の橋立と云へば日本三景の一といふから非常な絶景に相違ない、定めて眼を驚かす計の風光に接するであらうと豫期してゐた。然るに天橋立に着して見れば松林が海中に突出して居るだけで、さしたる稱すべき點がない、文珠へ參詣した時は流石に塵外の境にある心地がしたが、これとて日本三景と稱する程の價値が無い。船頭の云ふには船で松林を一周しても、天橋の眞景は眼に入る筈はない。彼の對岸なる成相山に登つて天橋を眼下に瞰る時は全景を一陣に集めて絶景謂はん方ない、こゝに天橋が日本三景の一たる價値があるといふ。然ればと云ふので船を押させて對岸へ上陸したが、暑氣太甚しくして如何ともし難い。暫時休憩して、茶店より草履を借り受け、成相山に登り、大汗を流して、例の見返りの松から天橋を一望した。如何にも好い風景であつた、決して平凡な風景ではなかつたが、併し眞に日本三景の一と云ふ價値は見出されぬ。静岡縣の江尻、興津近傍には之に劣らぬ。景

色がある、そこで船頭に向つて、これだけの風景では日本三景の一と誇ることはできぬといふた。時に船頭の云ふ天橋の風景は見様があるので、直立して眺めては平凡であるが、股目鏡で見れば真に天下の奇勝であるといふ。そこで、天橋に背を向けて立ち、腰を屈めて顔を我股より下へ出して逆に天橋を遠望したら、言ふに謂はれぬ絶景であつた。

却説、人生を觀るも天橋を見ると同じく、眼のつけ様に依つて大いに相違する。世人は兎角我身を高い所に置いて直立して人生を眺めるから何となく不足を感ずる、吾人は吾身を屈して人生を大觀するから何もかも愉快に感ずる。人の世は浴槽の如きもので、全身を浸して頭まで湯の届くやうな深い浴槽は無い。若し吾人が浴槽中に直立して湯の不足を訴ふるなら、湯屋の三助に笑はれるであらう。故に吾人は我身を屈して人生の浴槽に入れば湯の多少に拘はらず、全身を暖めることができる。これは吾人が天橋の股目鏡で悟つた人生

概である。

二十五、料理法と生活法其一 西洋通の人が云うたのに英佛獨の三國民を比較すると英人が最も料理が下手で、其次は獨人で、佛人は最も料理に巧みである。先づ概して云へば英人は甘い物を不かくして食ひ、獨人は不甘いものを不甘い儘で食ひ、佛人は不甘い物を甘くして食ふ。

以上英獨佛三國民の料理法の評言は果して事實に當るか否かは知らぬけれども、これを生活法の譬喩とすることが出来る。抑も自然界の萬物は吾人の目前に列ねられたる食物の如く、吾人は此食物を受くべき客の如く、佛は吾人に食料を供給する恩人の如きものである。吾人の心は此食物を調理して身の爲めになるやうに努むべき料理人である。英人の如く甘い物を不かくして食はせる料理人は世間に澤山ある。

或人は哲學を研究するに方りて哲學は宇宙の真相を大觀する學で

あるから、學問中の學問で、歡天喜地の大愉快なる研究であらうと思ふたが、實際にやつて見れば案外屍理屈と空想に充たされて、少しも面白くない。然らば醫學は人間の痛苦を除く神聖なる學問であるから、定めて面白からうと豫期して醫學を研究して見ると、これ亦案外つまらぬもので、病氣の本體さへ知れることは稀で、全く暗中に物を探るやうな、覺束ない學問である。それと同じやうに心理學も、物理學も、天文も、地文も、數學も、法律も、學ばぬさきこそ面白さうぢやが、實際に當つて見ると存外下らぬものである。文學者なども文豪とか、詩人とか、言はれて如何にも愉快らしいが、實際は三度のパンの爲に、毎日／＼腦味噌を搾り出して筆にするは、恰も榨木にかけられたる豆腐糰の如くで、少しも味が無い。然らば學者を止めて官吏に爲つたら、如何かといふに、これも外面から見れば人の尊敬を受けて月給を貰つて好い様ぢやが、官吏程貧乏なものはない、其上長官に願で使はれ、御

無理御尤で唯々諾々として御辭の塵を拂はなければ免官の禍がある、實に官吏はつまらぬ者である。然らば金の儲かる實業は如何といふに、此社會ほど没分曉漢や、我利／＼主義者や無風流漢の多い所のは無い、人間らしい人間は到底此社會には見出されぬ。然れば物質的なる社會を去つて精神的なる宗教界に入つて見ると、此社會ほど偏狭で頑固で、無情で、嫉妬心の多い動物の多く居る所は無い、宗教界は兎も君子の住むべき所でない、法服をつけた悪魔の住む所である。然らば一切の社會は下らぬ、詰らぬものであるが、吾人には朋友もあり、親戚もあつて互に相親んでゆくかといふに、實際は朋友などはつまらぬ者で、こちらが好都合の時分は朋友を名として厄介にならうとし、こちらが都合が悪くなれば知らぬ顔をして道で遇うても挨拶せず、こちらが位置でも得れば、彼の野郎が如何して、彼の位置が保てるものかといひ、良縁でもあつて美人でも娶ると、烏が鶴を娶つたやうに悪く云ふのが

友人である。然らば兄弟は如何といふに、兄弟は他人の始めとて、さもし根性の兄弟が多いから、頼みにならぬ。然らば同穴を契つた妻は如何といふに、妻も貰はぬ先きには定めて良からうと思つて、天女でも天降るかの如く想ふが、實際に妻を娶つて見ると女はと度し難い者はない、女子と小人とは何とやらの金言を想ひ出して、如何なる美人でも鼻について堪らなくなる。そこで女鼻に鼻といふ字を書くと嫌と讀む。然らば子供は可愛ものぢやから頼もしいかといふに、實際は子は三界の頭枷と云ふから、此れ程厄介な者は無い。思へば、我ながら我身も詰らぬ者である。愛想もこそ盡きてしまふ。

以上のやうに考へて生活するのが、甘い物を不甘くして食ふ仕方である。佛教で之を評すると迷倒の凡夫の生活法である。

二十六、料理法と生活法其二 生活法の第二に位するは、不甘い物を不甘い儘で食ふ仕方である。前の例に充てれば、

哲學も科學も詰らぬものであると云ふけれども、哲學や科學は元來詰らぬ筈の者で、面白い者ぢやと思つたのが間違である。哲學は元來空想の學ぢや、庇理屈の學ぢや、それが哲學の本分である。醫學とても其通り、所有病氣が醫學で解ると思ふのは大なる誤りぢや、醫學は本來不完全の學ぢや。醫學が何の役に立つか、役に立たぬのが醫學なのぢや。心理學も、物理學も、天文も、地文も、數學も、法律も、何も彼も本來詰らぬ筈の者ぢや、詰ると思ふのが悪い。文學者や詩人も一向面白くないと云ふが、元來文士や詩人には色情狂が爲る、妄想狂が爲る、それを天才とか何とか云ふから間違ひぢや。彼等は三度のパンを當り前に食ふ資格の無い人物共ぢや。詰らないのが元より當然なのである。然らば學者は止めにして官吏に爲つたら如何かと云ふに官吏も一向詰らぬといふが、官吏などを詰る者と思ふが間違ぢや、官吏は元來公衆の奴隷ぢや、小使ぢやないか、腦味噌の足らぬ奴等が官吏に爲る。長官

の聲の盛どころか、昔し支那には長官の養を嘗めた奴さへある、故に嘗養の徒てふ熟字があるのぢや。官吏に爲つたら、此位の仕事する覺悟でなくてはならぬ、それを官吏に爲つたら愉快ぢやろなど想ふは以ての外の次第ぢや。さればというて官吏を止めて實業界に身を投じたとして、やはり詰らぬと云ふが、元來實業は利益を目的とする者ぢや、損害を目的とする者ぢやない、されば我利我利が實業の本色なのぢや。此我利を目的とする實業家に物の道理が解らう筈がない、風流韻事などが解せる譯がない、それぢやに依て實業家は本來無風流、没分曉な者と定つてゐる。此社會が善からうと思ふは大なる誤解ぢや。然らば去つて宗教界に入れば此れも一向詰らぬと云ふが、元來宗教界は人間の捨場ぢや、人間並に職業の出來ぬ人々が此社會に捨てられて坊主になつたり、牧師に爲つたりする。固陋と頑冥は宗教家の本色ぢや、固陋、頑冥でなければ宗教家には爲つて居れぬ等ぢや。己れの宗旨ばかり

天下第一のやうに迷信して偏狹と嫉妬で固め上げた人間が高僧といふのぢや。法服を著用した赤鬼青鬼を名づけて法主とか法王とか云ふのぢや。彼等は人の血と肉とを常食として、舌鼓をうつて甘いというて居る。恐しいのは此社會ぢや、元來愉快でも何でもなし。また朋友に就て彼れ此れ云ふが、朋友などは元來頼むに足らぬ者ぢや、朋友は酒でも飲み女郎でも買ふ時に伴ふべき筈のものぢや、互に善を責むるなどは思ひもよらぬ、若し善を責めやうものなら、喧嘩してしまふ仇敵に爲つてしまふ、朋友は元來仇敵の候補者なのぢや。頼むに足ると思ふが大なる間違ぢや。兄弟も其通りで、元來兄弟は生存競争の對手である、兄弟が無ければ親の財産も全部自己一人にて占領ができる。兄弟があつては左様には參らぬ、兄弟は相競ひ相争ふのが其本分ぢや、兄弟を頼みにするなどは愚の至りぢや。妻とても其通り、元來妻は女ぢや、女は劣等の動物ぢや、此劣等の動物を假りて情慾を充たすのが間違つ

てゐる。妻に依て慰安を求むるなどは地を掘つて天を求むる如く  
 ぢや、不可能の次第ぢや。我子とても其通り、本來止むを得ずし  
 て出来たのが子供ぢや、故に子供は元來厄介な者に決つて居る。  
 また吾等が一生は元來詰らぬ者ぢや、詰ると思ふのが大間違ぢや、  
 詰らぬのが人間の本色ぢやと明めるがよい。

斯様に考ひて一生を詰らなく送るのが、所謂不甘い物を不甘い儘で  
 食ふといふ仕方である。佛教で申したなら、一切苦厄と悟つて三界  
 は皆苦の遍る所で、一つも楽しいことは無い、楽しいと思ふのが間  
 違であるといふへる二乗聲聞の分齊である。

二十七、料理法と生活法其三 以上の如き生活法は吾人にとつて何  
 の利益も無い、之に反して不甘い物を甘くして食ふといふ生活法が  
 ある。前例に充て見れば、

哲學でも科學でも吾人が之を研究することのできるは文明の餘澤  
 で實に難有いことである。且つ此等の學問に依て宇宙萬象を研究

すれば研究する程、其不可思議なことが知れ、思ひもよらぬ所に  
 佛の大慈悲を發見し、佛智の廣大なるに驚いて、愈信仰を高め、  
 歡喜の念を増すのである。又退いて省みれば多くの人々は哲學と  
 か科學とか文學とかいふ學問を修めたくとも修める餘暇もなく資  
 力も無い人が深山ある、さるを吾等は斯の如き文明の賜を受けて  
 智を研き徳を樹てることの出来るは何たる冥加であらう。斯様に  
 喜び勇んで學問をすれば、哲學者としては諸學の原理を統一して  
 宇宙の真相を達觀し、造化の眞髓に分け入り、醫學者としては單  
 に患者の病苦を療するのみでなく、國家社會の健全なる發達に貢  
 獻して、眞に人類の恩人と爲るべく、心理學者としては一切の現  
 象中最も微妙不可思議なる一切生物の心を研究して、造化の大な  
 る心に接し得べく、物理學者としては事物の原則、化學者として  
 は原素の法則天文學者としては天文、地文學者としては地文、動  
 物學者としては動物、植物學者としては植物、一切の學者が皆其



本職を以て満足し、其中に興味を見出し、其中に自己の使命を全うすることができる。また官吏と爲るのも容易な因縁では無い、公衆環視の中に立て公務を執るは恰も大智なる佛の前に立ちて事務を執るが如くで、少しも偽りは許されぬ、胡麻かしはきかぬ。これ實に大丈夫たる者の爲すべき名譽の仕事であると思ふ。殊に不肖の身を以て此公職に當るは勿體ない、大いに恐れ謹むべきである。此公職を果すと果さざるとは己れ一身の榮辱の係る所であるのみでない、國家民衆の利害に關する所である。吾人は斯の如き名譽の職を授け給ふたる佛天の徳に感謝せねばならぬ。また實業家も其通りで、天下の物資を左右して、生産分配等の大切な職務に當るは何たる名譽のことであらう。天地の恵みの豊かにして宇宙は一大寶庫なるを知るには實業家が一番よ。殊に他の階級の人々よりも比較的利益多き地位に立つものは實業家である、洵に結構なる身分であると思へば、喜び勇んで業に就くことができる。

きる。また宗教界の人も其通りで、忠實に神佛の教へを人に傳へ、自らも欣び人をも欣ばしめ、自らも懋め人をも懋め、自らも救ひ人をも救ひ、絶えず人の信施を受くるは恰も神佛より直接に施物を受くるが如く、神佛の心を以て吾心として、親切と篤實を以て人を教へ導くを樂みとする。されば宗教家は結構な身分である、一文不知の尼入道でも、佛に事へる身なればとて人の上みに坐して敬禮を受くるでないか。冥加に過ぎて餘りに勿體ないと思はるゝは僧侶である。さしたる働きも無くして身分不相應な大伽藍に住して、家賃一文出すではなし、三度三度、佛飯を飽くまで食し、法衣には綾錦を重ねて諸人の敬ひを受ける。これが結構でなくて何が結構であらう。佛祖の餘徳がわれればこそ愚僧も凡僧も墮落僧も乞食僧も、それ相當に生活して居られる。難有ことぢやによつて喜び勇んで及ぶ限り人の爲め民の爲め功德を積み善根を累ねて報恩をせぬと尉がわたる。斯様に心得たなら天下の事は一つとし

て詰らぬことは無い。世間法即佛法、資生産業も實相と相違せずで、所有人間の業務が皆佛事を作すのである。朋友は親むべし、妻子は愛すべし、両親は敬ふべし、吾等の如き不肖の子でも、子と思へばこそ今日まで愛育し給ふたる親ほど難有い者はない、吾等の如き不徳の身にも妻あり子あるは何の幸であらう、妻は佛に代りて我を慰め呉れる菩薩であると思ふがよい。子は我を導いて親の恩と佛恩を知らしむる善知識と思ふがよい。かく思ふ時は我ながら我身の幸福なることが知れて、謂ふに言はれぬ欣びを感じ、涙を落すに至る。

以上の如く考へて一生を楽しく送るのが所謂不甘いものを甘くして食ふ仕方である。

二十八、服部元好の話 これより少しく實例を擧げて不幸中の妙趣を説明して見やうと思ふ。

加州金澤の醫師に服部元好といふ人があつて、嘗て失火の爲に我

家が烏有に歸した。其火事の最中に元好は少しも驚き噪ぐ様子もなく、我家の焼けるのを悠々として見て居た。すると翌朝になつて焼け残つた門に一枚の紙が貼つてある、何か文字が認めてあるので、讀んで見ると、

御醫者さん家の黒焼何になる

と記してあつた。これは近所の人が戯れにしたのである。元好直ちに筆を執つて其下へ、

日僱大工の腹薬なり

と認めたまうである。

我家の焼けたるは不幸に相違ないが、其不幸を啣ちて泣いたり恨んだりしても何の効も無い、それより我家の黒焼も大工や左官の腹薬になると思つて喜べば頗る愉快である。

世の中の萬事は人の思ひよらぬ所に微妙なる配合のあるもので、俗に謂ふ

禍も三年たてば役に立つ

ことがあるから、必ず不幸に心を囚はれてはならぬ。吾人は東京市中に住んでゐるが、東京ほど塵埃の多い所はなからう。風さへあれば眼を開く事のできぬほど埃が起つ、實に不愉快極る。これ東京市民の一大不幸と謂はねばならぬ。併し退いて考ふれば地球に塵埃が無くては致方が無い、塵埃は土地の粉末である、土地は吾人の衣食住を供給する恩人である、これが無ければ吾人は生きてゐられぬ。石川成章君の話しに、

塵埃は普通眼にも見えぬ程、微細のものであるから、通常誰でも一向何等の注意も拂はず、吾人人生と何等の交渉も関係もないやうに思つて居るけれども、少しく注意して調べて見れば、是ほど人生に重大なる関係を有する物は無いと言ふてよい位である。大空の晴れ渡つた時に、瑠璃の如き奇麗な色を顯はせば、真に一點の塵翳も留めないやうであるから、晴天一碧拭ふが如しと形容

するけれ共、實は微塵が空中に澤山あるから、其御蔭で蒼く見えるので、一點の塵も無かつたならば、決して大空は蒼くは見えないのである。太陽の光りが空中の微塵に當れば、擴散せられ、其中赤い色は變向すること最も少いが、蒼い光は變向する事が多いから、其光の變向した方を見れば蒼く見える譯である。故に大空を眺めて見るに、太陽の直接附近の色は赤色に白色が雜つて居て、さはど蒼くは無いが、太陽と吾人とを連ねた方向から直角に眺めた空の色は空中の微塵に當りて、變向した蒼い光が最も多い爲に、鮮かなる蒼い色に見える。

又フョーンエートケン氏の研究によれば、水蒸氣が空中で凝結するに當りては、是非固形體の核心を要するものであつて、此核心が無ければ、空氣中の水蒸氣が凝結するにたよる所が無いから、容易に凝結しない。従つて霧も霞も雲も雨も無いであらうといふ事である。實際は霞が山腰に多く、霧が村落のある邊に多いのは、全

く塵埃の多い爲である。塵埃が全く無かつたならば、其れこそ大變である。加之、大氣中に於て太陽の熱を最も多く吸収する者は塵埃であるから、大氣の温めらるゝのは重もに其塵埃が熱を吸収する爲である。

地球以外にも宇宙塵といふのがある。我地球上に年々幾多の流星を見るが、この流星は宇宙塵が地球の引力に引きつけられ、地球に向つて落ちて来る途中で、大氣を強く壓迫し、大氣を摩擦して強熱を發して光るのである。其れが即ち隕石である。ノルメンシヨル氏の研究によれば、この隕石の爲に年々地球重量の増加すること約一千萬噸である。

太陽の引力で宇宙塵が其上に落下する事は非常に夥しいもので、年々少くとも三千億噸以上であらうと云ふ。此隕石の落下によりて、太陽が日々發散する輻射エネルギー即ち光熱の一部は補充せらるゝ譯である。又太陽は始終強大なる輻射壓によつて、無数の

帯電極微塵を實際に發射するものであつて、我地球が光熱を受くるも、此帯電極微塵の作用によつるといふのが最近の學說である。果して然らば塵埃の如き無用有害と思はるゝ物も仔細に研究して見れば微妙不可思議なる自然の配合に由て吾人が幸福の源泉と爲つて居る。塵埃でさへ斯の如くである、況や他物をや。

予が友人の一なる佐治實然氏の謂はれたのに氏は家を出て長く旅行する時には、其旅行中に我家は焼け、妻子は病死するものと定めて置く。而して旅行を畢つて歸つて來ると、先づ遠方から我家を望み見る。若し焼け亡せて居ても元より期したること、狼狽する憂ひは無い。また幸に焼けもせずして屋根や玄關が見えれば此程嬉しいことはない、新たに一軒の家を得たる心地がする。そこで我家の入口に近づくと、若し誰も居らぬなら、豫て期したる通り妻子も死んだものと明めて念佛を申す。若し幸にして妻子が健全で居たなら、之に超した喜びはない、恰も新たに妻を迎へ子

を挙げた如く思ふと言はれた。

これは實に味のある話で人命は無常であるとすれば何時如何なることが起るか知れぬのが當然である。さるを長い間の旅行中、我家には少しも變化はあるまい、我家内には何の變化もあるまいと思ふは非常なる迷執である。是の如き迷執があるから、萬一にも旅行中に火事にでも逢うて資産を蕩盡するとか、家内に病人や死者でもできると周章狼狽して、活きて居る甲斐が無いやうに思ふ。これ畢竟覺悟の足らぬと申すものである。

吾人の壽命について考察するに短命の人もあり長命の人もある。動物の可能なる壽命は生れてより發情期に至る迄の八倍、又は生れてより成熟期に至る迄の五倍としてある。我日本人は男女共大略十四五歳で發情期に達するから、十五歳の八倍は百二十歳、それから廿四五歳に成熟期に達するから、廿五歳の五倍は百廿五歳である。さすれば日本人に可能なる壽命は百廿歳より百廿五歳であると云ふ説

も出て来た。大隈伯が百廿五歳活きると謂はれたのも無理はない。

然しながら之は健康の人に可能なる年齢といふに過ぎぬので、日本開國以來百廿五歳まで長命した人は今日まで十本の指を折る程ない、之れに反して母の胎内で死亡して、闇から闇へ往く子供は幾千萬人とあるのが目前の事實である。さるを人間は必ず百廿五歳まで活きると定めて居ると、古稀の七十歳で死んでも早世したやうに思ひ、八十九十の老耄に至つて歿しても非常に惜しいことをしたやうに悲哀を催はし、百歳で死んでも、百七歳で帶解おびとぎの祝をして死んでも早世したと思ひ、百十歳でも百廿歳でも夭折おとずれしたと嘆くであらう。之に反して吾人は母の胎内で死ぬとも可能であると覺悟して置けば、兎も角も生れ出たのは長命の一である。生れてから一日活されば一日の長命二日活されば二日の長命、乃至一年二年と活きた人は幸の中の幸と思ふがよい。

斯れば今日只今死ぬことも可能であるから、今日以後幸にして一日

でも一刻でも活きさられたら、それだけ活き延びたと思つて喜ぶがよ  
So.

日々是好日

ぢやに依て、其日其日を喜び勇んで暮すことが何より肝要である。

二十九、涅槃經の喩 幸といひ不幸といふも天より降るのでもなく、地より湧くのものない、皆心の用ひ方によつて定まるのである。涅槃經に有名な譬喩がある。其全文は下の如くである。

女人ありて他の舎に入るが如し、是の女端正にして顔貌美麗なり、好瓔珞を以て其身を莊嚴す。主人見已りて即便ち問ふて言く、汝の字は何等ぞや、誰に繫屬するか。女人答て言く、我身は即ち是れ功德大天なり。主人問て言く、汝の至る處、何の所作を爲すや。女人答て言く、我至る處、能く種々の金銀、瑠璃、玻璃、眞珠、珊瑚、琥珀、硨磲、碼碯、象馬車乘、好婢僕使を與ふ。主人聞き已つて心に歡喜を生じ、踊躍無量なり。我今福徳の故に汝をして

我舎宅に來至せしむ。即便ち、香を燒き花を散じ供養恭敬して禮拜す。復門外に於て更に一女を見る、其形醜陋にして衣裳弊壞し、諸の垢膩多し、皮膚皴裂して其色艾白なり。見已りて問て言く、汝が字は何等ぞ、誰に繫屬するや。女人答て言く、我は黒闇と字す。復問ふ、何が故に名けて黒闇と爲す。女人答て言く、我が行く處、能く其家の所有財寶、一切をして衰耗せしむ。主人聞き已りて即ち利刀を持し、是の如き言を作す、汝若し去らざれば當に汝が命を斷つべし。女人答へて言く、汝甚だ愚癡にして智慧あること無し。主人問て言く、何が故に我を癡にして智慧なしと名くるや。女人答て言く、汝の家中の者は即ち是れ我姉なり、我常に姉と進止共に俱にす、汝若し我を驅らば亦常に姉を驅るべし。主人還り入て功德天に問ふ、外に一女あり、是れ汝の妹なりと云ふ實に是と爲すや否や。功德天言く、實に是れ我妹なり、我此妹と行住共に俱にし、未だ曾て相離れず、所住の處に隨て我は常に好

を作し、彼は常に悪を作す、我は利益を作し、彼は衰損を作す。若し我を受する者は亦應に彼を受すべし。若し恭敬せらば亦應に彼を敬すべし。主人即ち言く、若し是の如く好悪の事あらば我皆用ひず。各々意に隨て去れ。是の時に二女便ち共に相將りて其所止に還る。爾時に主人其還り去るを見て、心に歡喜を生じ、踊躍無量なり。是の時二女復共に相隨て一貧家に至る、貧人見已りて心に歡喜を生じ、即ち之に請ふて言く、今より已往、願くは汝二人常に我家に住せよ。功德天言く、我等先きに已に他の爲に驅らる、汝復何に緣つて俱に我が住せんことを請ふや。貧人答て言く、汝今我を念ふ、我汝を以ての故に復當に彼を敬すべし、其故に俱に請ふて我家に住せしむ。

却説以上の譬喩の如く美貌なる功德天女の來る處には之に伴うて醜惡なる黒闇女が來る、幸あれば不幸あり、明あれば闇あり樂あれば苦ある、これ人生の免るべからざる所である。そこで世人の多くは

醜惡なる黒闇女の居る爲に端正なる功德天をも驅り去る、即ち人生に不幸あり苦あるが爲に幸福も快樂も並べ捨る人が多い。これは大なる心得違である。華は咲けば必ず散る、咲くも實相、散るも實相である、二宮翁の歌に

咲けば散り、散ればまた咲く年毎に

ながり盡せぬ花のいろく

とある如く、花の咲く榮華の中にも謂ふべからざる妙味があり花の散る衰亡の中にも亦謂ふべからざる教訓がある。

火燧には別に火燧の寒さかな

と古人も言へる如く寒いからとて火燧に入ると暖い様であるが、火燧には別に火の寒さもあり、

大名とあふかれながら暑さかな

で、衆人に尊敬せられて避暑でも何でも自由にできる大名でも暑さは同じく忍ばねばならぬ。畢竟するに不幸を啣つは人の我儘より出

ること、涅槃經の譬の中の貧人の如くに功德天を敬するが故に黒闇女をも敬ひ、幸福を樂むが故に不幸をも喜ぶがよい、不幸なければ幸福も無い、苦がなければ樂も無い、苦樂は外物にあるのでなく、我心にあるのである。

#### 第四章 逆境中の妙趣

三十、逆境の妙用 人に境逆あるは深庵大根に重石あるが如く、豆腐に苦鹽あるが如くである。深庵大根には重石がないと腐敗する、豆腐には苦鹽が無ければ固らぬ。人間の腐敗を防ぐには逆境の重石が最も好く、人間を堅實ならしむるには逆境の苦鹽を強くするがよい。之に反して順境は人をして柔弱ならしめ、腐敗に陥らしむる。人は順境にのみ居る時は温湯の獅活のやうになつて到底困難に耐へることが出来なくなる。

また譬へば逆境は小供に灸をするやうなもので、熱くて苦しいけれども身の爲である。また體操をするやうなもので絹蒲團に包まれて室内に臥て居るやうな順境よりも、戸外に出て荒い空気に曝されて體操をするは苦しいけれども、それが健康の本と爲る。また逆境は冷水浴をするやうなもので、温湯に入つて樂くして居る順境よ



り苦しいことは言ふ迄も無いが、逆境の冷水浴は一切の諸病を除く力がある。されば吾人は逆境に居るを喜び、これを佛の大慈悲として甘受せねばならぬ、小供に灸をすゑるのは親の慈悲で、小供に冷水浴をさせるのは親の智慮ある體育法、小供に體操をさせるのは教師たるもの、親切である。佛は吾等の大師であり、慈母であるから、我等を逆境に置き給ふと思ふが好い。ラスキンが軍人の妻たり母たる人々に告げた語に、

危険に際して勇敢なるは何かあらん汝等は英國婦人にあらずや。運命の變化に處して勇邁なるは以て偉とするに足らず、何となれば汝等は互に相愛するにあらずや死別の時に當りて沈勇なるは以て偉とするに足らず、何となれば汝等は尙ほ天國に於て相愛するを得るに非ずや。然れども幸福の時に方りて勇壯に、榮華の旭日赫々たるに際して沈着に公正に其身を處し、神の恵み最も豊かなるの日に方りて神を忘れず、人の吾を要すること最も少き日に於

て吾を信頼する人に背かざるは容易の勇氣にて爲し得べきにあらず。汝等の祈禱が最も熱烈なるべきは汝等の夫たり子たる軍人の不在を哀しむの日にあらず、戦争の危険を冒すの日にあらず。汝等の看護が最も懇ろなるべきは汝等の夫たり子たる軍人の病床に横はるの日にあらず。汝等が祈るべきは少年軍人が榮華に誇るの日にあり。彼等の周圍に横る所の危険は單に彼等の自由なる意志のみなるの時に祈るべし。汝等の看守すべく祈禱すべき時は彼等が死に向ふの日にあらずして誘惑に向ふの日にあり。とある如く、吾人の恐るべく、謹むべく、佛を念じ、神を祈るべき時は逆境にあらずして順境の時である。順境は最も怖るべき誘惑を來す、逆境の時に滅びた國は昔しより一つも無い、順境の時に腐敗して亡びた國は比々皆然りである。吾等を逆境に置き給ふ佛の恵みを感謝して好いでないか。さるを逆境の爲に天を怨み人を咎めるは以ての外の次第である。

三十一、逆境の功德 佐藤一齋の語に

順境如春、出遊觀華、逆境如冬、堅臥看雪、春固可樂、冬亦不惡、とある通りで、順境の春の景色は固より悪からう筈は無いが、逆境の冬の風光も捨て難い趣きがある。之を風流に譬へたならば雪月花の奇勝は風雅の順境であつて、人生の俗務は風雅の逆境である。併し雪月花の順境を愛でる計りで、人事百般を没風流と見るは凡眼で取るに足らぬ。芭蕉翁の如き大人物になれば

見る所月にあらずと云ふことなく、思ふ所花にあらずと云ふことなし

で日用光中が風雅三昧である。さればこそ

天地風雅なり、萬象風雅なり

と悟入して一代の宗匠と爲つた。芭蕉翁の如きは吐いた句ばかりが風流なのではなし、一代の行狀が風雅の徳に合するのである。吾人の信仰も其通りて順境の時ばかり樂天的で、逆境になると厭世的と

なるやうでは心細い。

愛媛縣温泉郡に余土村といふ模範村があるが、此模範村を組み立た村長は森恒太郎といふ盲人である。彼は如何なる經歷を有するか、吾人は未だ仔細に研究して居らぬが、盲目に爲つてから、非常に精神上の苦悶と戦つて遂に大なる信仰を得た。彼は基督敎を信じてゐるといふ話もあるが、比叡山に登つて一切經を繙いたり、南禪寺で坐禪をしたりしたとも云うてある。斯様に逆境の中に苦悶して信仰を得たる結果、大願心を發して模範村を形成するに至つた。

果して然らば彼れ及び余土村が今日あるに至つたのは逆境の功德であること明かである。

二宮尊徳翁も逆境の子である。先祖傳來の田地は洪水で失うてしまひ、父には早く死別れ、艱難辛苦の中に生長した。

東西南北四本の柱、青天井を我部屋として

といふ翁の語に徴するも如何に貧困であつたかが知れる。翁が後に至つて川久保民次郎といふ貧しい少年に告げられた語に、

予が幼少のをり、菜を蒔まうと思つたが、我家に鉄が無いので、隣家の老翁に鉄を貸してくれと云ふと、己れの家でも菜を蒔くから鉄が入用ぢや、貸されぬといふ。そこで、それなら當家の菜は私が蒔いてあげませう、蒔いてしまつたら、何卒私に貸して下されと云うて、隣家の菜を蒔いて後に其鉄を借りて使うた。其時老翁は予を憐みて何でも道具の要なものがあらば、何時いつでも来て使うが好いと親切に言うてくれた。何でも若い者は勤勞をするが第一の心掛けぢやといはれた。

さすれば二宮翁の幼少の時には鉄一つ無い貧しい生活であつたに相違ない、斯かる逆境が翁を玉成して大人物と爲らしめたのである。

三十二、逆境の利益 逆境の利益は人をして感憤興起せしむる點にある。國家が亂るれば之に感奮興起して忠臣が踵を接して出る、家

が貧しければ孝子が現はれて其家を再興する、これ自然の理數であつて人生の眞味は斯かる點に存するのである。

三州の鐵文道樹和尚は行脚の時に肥前の伊萬里に到つて休々巷の黙子禪師に參した。或一夜大衆と共に夕飯を食ふ時、長大息をして言ふには、斯く檀越の信施を受くるも之を用ふるだけの徳道がない、哀しいことぢやと。時に隣席に風外といふ禪者が居て、汝若し飯を食ふ底のものは何者ぞと識得したなら信施は愁るに足らぬと言うた。鐵文は之を肯はずして云ふ、縦令識得するも信施を消することは難からう。時に風外蕪向から一掌を興へた其時鐵文は覺えず憤然として湯盞を壁に投げつけて僧堂に歸つた。其後殘念でならぬから風外と言を交へざること六ヶ月の久しきに及んだ。時に黙子禪師が叱して言はるゝに、風外は汝の爲に警策したのぢや、何故彼を恨むぞと。それでも鐵文は尙ほ服せずして風外を惡み、吾れ若し大事を發明せば必ず風外を打ち殺すと息巻いきまてゐた。

それより奮勵して坐禪し、一日櫻樹の下の石上に坐して、半夜に疲勞し困睡して打ち倒れたる刹那悟つた。直ちに方丈に上りて所解を呈すると、馱子禪師も證明せられた。そこで風外の警策を欣んで坐具を展べて懺謝して、老兄の激發にあらすんば争か今日あるを得んやと云ふた。

禪門の古老が大悟したのは皆此激發によるので、遠磨大師の慧可大師に於けるを始めとし、歴代の宗匠が皆師家の逆手に遇うて奮勵して大事を了したものである。臨濟の黄蘗に於けるが如き、三度の痛棒を喫して始めて大機と爲り、白隠の正受老人に於ける如き、非常なる毒手に觸れて人と爲るを得たのである。是を以て禪の祖師方も逆境の子ならざる人は一人もないと申してよい。無住禪師の沙石集に次のやうな話しかあつたやうに記憶してゐる。

一人の男が其妻と同棲して夫婦の間、至つて睦じく暮してゐた。然るに夫が風の心地と打臥したが、次第に病氣が募つて、今は命

數の盡きたるかと思はるゝ程重症になつた。時に夫は妻に向つて、己れは此重病では到底助かる氣遣はない、今度といふ今度は忌やでも應でも黄泉へ旅立をせねばならぬ、死ぬる我身は決して厭ふではなけれども、後に残る其方のことが心配になる、何卒、己れの無い後で良縁を求めて立派な夫に嫁づいて夫婦仲善く暮してくれ、また己れの事も、たまさか思ひ出したら、三度に一度は線香の一本も立てくれと、哀しい聲で言ひますから、女房も涙にくれて、あなた其様に心細い事をいうて下さるな、假令あなた身に何の様な事がありませうとも私は決して他家へは嫁りませぬ、必ずあなたの爲に操を守つて、御位牌へ泥を塗るやうな事は致しませぬと、健げに申しましたが、夫はまだそれでも安心が出来ぬ。此様な若い美しい女を娑婆に残して死んで行く己れは何たる因果であらうと心の中に恨みながら申しますには、如何にも其方の言ふ通り、其方の堅い操を決して疑ふてはないが、うら若い女が一

人であれば、引手数多の世の中だから……女寡婦には花か咲くで、己れが死んだら其方は一層美しう見えるだらう……中々孤獨が守れるものぢやない、それより己れの言ふやうに他家へ縁づいて呉れと何所までも女房の操を疑ふ様子であるから、妻もキツト決心し、其處を起て勝手元へ行きましたが、再び戻つて来て夫の側へ泣き倒れました。そこで夫も何事かと驚いて妻の顔を見ますれば、庖刀で鼻を斫り落して顔一面血だらけになつてゐる。これを見て病人もそれほどまでに我身を思つて呉れるかと大いに喜び、また二つには鼻の無い女に戀する男も無からうから、先づ安心と思つて、二日三日と経過するうちに、此安心が大層養生になつて重病も次第に軽くなりましたから、これも女房が志による所ぢやと、眞實女房を大切と思つてゐました。然る所病氣は益々快方に赴くに遂に全快に及びました。始めのうちは女房の御庇で病氣も愈りましたし、己れに操を立ん爲に鼻まで切つた女房であるから、悪

からう筈はない、然れども目を經るに隨て、我儘が增長して、鼻の無い女房が却て鼻につくやうになりました。そこで薄情にも口實を設けて女房を離縁してしまいました。追ひ出された女房は口惜しくてたまらぬ、否、口惜しいと言ひたいが鼻惜くてなりませぬ。そこで狂氣のやうになつて御領主様へ訴へ出ましたから、役人が早速御取調になつる、亭主を呼出し、尋問に及ぶと、女房の訴の通りに相違ないと解つた。此旨を御領主様へ申上ると、弁は不届の奴なり、罰として夫たる男の鼻を斫り取れと命せられた。依て彼の男は役人に鼻を斫られて歸宅したが、扱、女房が無くては何かに不自由であるが、鼻の無い男の女房に好んでなる物好きも無いので、以前の鼻の無い女房を呼び戻して再び一處になりました。以上から、鼻の無い夫婦一對出来上つたと申すハナシであります。以上の物語には明かに人間の心が順逆の二境に轉せられて、逆境には誠實と爲るが、順境には不實となるの意を寓してある。吾人も油

断すると此物語の二の舞を演ずるから、慎み戒めねばならぬ。  
 三十三、逆境は恩に感ぜしむ。逆に居る時は君父師兄の恩に感ずる  
 とが深い、大石良雄を始め四十七士が淺野公の爲に艱難を冒して復  
 仇したのは君家の滅亡てふ一大逆境に遇うたからである。若し順境  
 に居て泰平の餘澤にのみ浴してゐたなら、大石も其縛名の如く盡行  
 燈として一生を了つたであらう。況や其他の下人等は其名どころか、  
 彼等が世に生存したことすら吾人は知らぬに相違ない。然るに彼等  
 が君家の逆境に遇うた爲、平生受けた君公の御恩が今更のやうに深  
 く身に沁みて、一大事を決行するに至つたのである。されば彼等が  
 君公の恩に感じたのも、吾人が彼等を得て日本歴史を飾ることので  
 きたのも、共に逆境の御庇である。楠公や小楠公が大日本の誇りと  
 すべき誠忠無二の武士道の鑑と爲つたのも逆境の爲である。後醍醐  
 天皇が蒙塵の時賊に追はれて笠置の城を御立出になり、雨に逢うて  
 松の木の下に宿らる。

さして行く笠置の山を出しより  
 あめが下には隠家もなし  
 と嘆かせ給ひ、これを見奉りたる萬里小路藤房卿が、涙せきあへず、  
 いかにもせん頼むかけとて立よれば  
 なほ袖ぬらす松の下露  
 と詠せられたといふ話してであるが、斯の如き逆境の時代に生れ遇う  
 たのが楠公父子であるから、君恩の厚さに感奮興起したのである。  
 また今日では神として祭られてゐる佐倉宗吾も同胞の人民が塗炭の  
 苦みを受ける逆境に遭遇して義心を奮ひ起したのである。逆境は譬  
 へば鐵槌のやうなもので、堅實なる吾人の鐵石心を鍛鍊して光明を  
 發せしむる力がある。是を以て吾人は逆境に生れ遇うたのを恨んで  
 はならぬ、否、却て佛恩の鴻大なるに感泣するがよい。  
 如來應供正徧知、憐愍衆生、覆護衆生、等視衆生、如羅喉羅、  
 と涅槃經にあつて、佛は正徧知であるから、其知らざる所なき妙智

を以て吾人の爲に憐愍を垂れ、絶えず吾人を覆護し給ひ、一切衆生を平等に御覽なされて、一子の羅喉羅尊者を愛し給ふと異らぬ。されば善人も悪人も、男も女も、幸福なる人も不幸なる人も、順境の人も逆境の人も、佛の慈悲に漏る者は一人もない。此信仰を以て喜び勇んで逆境に居るがよい。王學の泰斗たる中根東里の如きは逆境に人と爲つたが、之が爲に親の恩を深く感せられて、大孝の人である。

東里の父は酒を好んで、時々泥酔するを常とした。或時父が他家に行つて、夜に入つても還らぬから、幼少なる東里は心配して迎へに行くと、父は途中で打倒れ、前後不覺に眠てゐる。二たび三度、呼び覺さうとしたが、死んだやうになつて起きぬ。それで我家へ立還つて、母に向ひ、今晚は父は他家へ一泊するとのこと、蚊張が足らぬから一張持つて来よと言はれましたと、母の心配せぬやうに話しをして、蚊張を持つて行つて、路傍の木の枝に吊り、

父を其中に入れて終夜其側に看護してゐた。東里は一生窮境に甘んじてゐた。江戸の辨慶橋側に住んでゐた時は糸や針を賣つたり、竹の皮の草履を賣つて細い煙を立て、聖賢の道を楽しんだので、自ら皮履先生と稱した程である。

時は延享三年のことであるが、東里の弟の叔徳が妻に死なれて、其冬に三歳になる芳子といふ女兒を抱いて、相州から東里の當時住んでゐた下毛まで来て、芳子の養育を依託したことがある。其翌年東里は芳子の爲めに新瓦と名つくる文を草して親の恩の廣大なることを仔細に記して、芳子が成長の後に之を讀んで、修身の資とするやうにした。

本文は非常に長いから、略抄して見やう。

吾汝芳子、汝相模國人也、何爲遠來、居於下毛、此汝父不能能汝……其薄才拙謀、誠可笑也。雖然以汝觀之、其哀々者、孰大於是、吾將語之。往年甲子春、二月廿四日、汝母織生汝、未及舉汝而遂

世矣。則感汝愛汝者、唯汝父與汝外祖母也……我常與汝父同愛、而汝之鞠、則不如汝母也、惟其不知汝母也、是以感汝益深、故凡所以鞠汝者莫不至矣、則雖汝母、亦無以加焉、其所欠者乳耳、家貧、不得為汝買乳婢、則乞乳人之婦焉。汝之啼也、抱而就之、然汝未能多飲、纔飽則已、少焉復餓、餓則復啼、汝父安得不數往而乞焉。乍往乍還、日夜不輟、如此者數月、終為其所厭矣。於他婦也亦如之。不得已、乃代乳以糜、豈不悲哉。然汝父躬自為之、任不失宜、多寡有節、與之以時、故汝雖不得乳、亦未嘗病、且無病矣。是汝父能應其變以完汝也。夫親於子也、父生之、母鞠之、若汝父、非唯生汝、而又鞠焉、此兼父母之德、而其勞苦又如是、汝豈忍忘之哉。

咨汝芳子、雖者汝父之鞠汝也、不唯鞠汝、亦不可以不自食焉。苟不自食焉、無以鞠汝、故託汝於西家之媪、而從事於市、將多得錢以與其人、而使厚養汝且以自食焉、亦不得已耳。於是竭心窮力……

……日行數里、營々汲々……然錢不可多得、而所以與媪者未備也……則欲使媪不厭望而遷怒於汝其可得哉。此汝父之愛、所以愈深也。昔者吾與汝父寓於江都、其隣之婦、貪而虐人、皆惡之、竊號為狼、狼嘗養人之兒、以受其直、直之未入也、愛兒如子、既得其直、則如棄焉、此其所以為狼也。兒纔三歲、其始至也、豐頰善笑、甚可愛也。未幾、憔悴不忍見也、是何故哉、餓不必得食、渴不得必飲、雖携之使行、雖定之使寢、口未能辯心未能慮、自投而泣、恐其將見怒於狼也、不敢出聲、怫鬱泣血如幽囚、然又有群兒侮之、唾其面、終其臂、搯其髮、爪其膚使其號位、以為嬉戲、而狼不禁焉。又從而笑之、見其父來、僞愛兒、抱之撫之、使笑且言、欲以欺其父、不亦狡乎。夫飢者易為食、渴者易為飲、今此兒也、唯狼之虐是畏、故縱見抱、藏笑藏言。悲夫、父見兒之憊也、泣然涕下、豈不察其所由哉、不敢言耳。且欲以慰兒、故笑見之、兒亦見父顏、如解倒懸、見齒而笑、乃言曰、君來、君來、其喜愈甚、而愈可悲。



也。於是父實兒於懷、與之飲食、從其所欲、使極歡焉。……其將去也、慮兒之弗許、故不敢告以實、與之菓子若木偶、以怡悅之、然後給曰、如廁、或曰如鄰、兒則許之……笑而送之、父之去也、纔出其門、則木偶及菓子、盡爲群兒所奪……呼父而啼、啼極而寐、寤則復啼、吾與汝父、不忍聞其聲也、遷坐而食、猶未能飽、況其父乎。彼度兒之將如此也、豈不竊腸回魂飛哉……大抵如是、而皆病矣。自此以往、吾不得而知焉。夫汝之於嫗也、亦此類耳、然而來至於此極者、以汝外祖母在其隣也……嫗其憚之、是以不敢輕汝而肆其虐。去年丙寅秋九月、汝外祖母亦沒矣……冬十一月、汝父來謀諸吾、我恐嫗之將虐汝也、未及問其詳、乃讓汝父以不與汝偕來、曰此投肉於虎、而冀其不食也、豈可得哉。於是使汝父速還迎汝、然後計日以俟。是時、天將雨雪、寒威可畏……汝父得過臻于西家及汝未死而救之矣、然而汝困憊已甚、泄利數日、張如鼓、頭生瘡……蠅蟲繩々、雖見父來、而不能起、又不敢言、

唯目逆之、汝父既更汝衣、又以身嫗汝、抱以還家、鞠之如初、且使飲藥、經二三日、而後汝纔言且笑、然泄利未已。食飲尙少、不可以風、故汝父欲暫家居以待汝全愈、且以自休然後發焉。既而又謂、囊中之錢、纔以足治裝若曠日以費之、不可往矣……遂發、置汝於襁褓、日行十里、不能十里、如其費何……是月廿三日、宿于戶塚、汝猶泄利、乙卯宿于江都、汝始善食、丙辰宿于杉戶、泄利乃愈、丁巳至于知松巷。是歲汝父年五十、當此祁寒決辰之間、跋涉往來百二十里、而其窮苦又如。是。杏汝芳子、汝之初至於斯也、雖與汝父俱、然以憚我故未曾見齒、終口塊然坐於一處矣、見者或謂、此將死、不能長矣。吾與汝父亦以爲憂、然汝父將從事焉、不可以不早還相摸、雖欲暫留以待汝親我、豈可得乎、其將行也、與汝菓子而別、且誠汝曰、唯伯父之命是從、亦可悲也、而汝未有悲色、不知其遠行也、及至日暮、而後思之、乃泣曰君不在、君不在……吾抱汝負汝、強笑多言、以慰

論汝、然未能止其泣也。

吾汝芳子、今春以來、汝已親吾如父矣、而我未能愛汝如子也、爲有愧焉。何以知之、鄉也吾觀汝之與汝父、雖夜寒衣薄、而來嘗啼、及與我寢、則雖暖亦啼。何也、蓋汝父豈不欲輾轉反側以適已哉、恐其動汝、是以不敢、待汝自動、然後從之。我則不然、雖阻勉爲之、而不能久矣。此其所以異也。又汝父未嘗怒汝、汝之有過也厲其聲、正其色、以警焉爾、故叱汝不及、答汝不及、痛、是效汝也……若我怒汝、則自中心達面目、叱汝必愕、答汝必痛……吾甚愧之、夫甚愧之、是以不爲、雖則弗爲也、然其所以爲者存焉、無乃與汝父得壤乎

吾汝芳子、我亦孺旅、糊口四方、於今年……而迎汝者、欲使汝父姑舒汝死然後漸爲之計爾……汝父之愛未弭也、而其愛大於前日哉、何以作之、汝既親我、又無疾病、笑言嗚々、色容日盛、且諸君子之臨吾廬者、閱汝幼客於斯也、有賜汝衣帶者、有賜汝書

圖者、有賜汝菓子木偶者……此豈汝之所敢望哉、此相摸時、實爲天淵、汝於是乎氣盛志佚、漸以驕恣、欲行遠也、欲升高也、於衣有所耻焉、於食有所擇焉、亂我籩豆、遷我書策、使我不適跪處、吾雖爲之施然作色、而不恤焉、提我耳、彈我鼻、視我如偶人然、汝未及誨也如此、若欲待其可誨而後誨之、則我與汝父、墓之木拱矣。其爲愛也、何曾微寒。吾故曰大於前日哉。汝能讀書以考吾言、然後思汝父之德、則將知其真昊天罔極、雖百汝身、然未足以報之矣、汝其念哉……及爲人婦也、順而舅姑、敬而所天、宜汝室家、使而子孫有紉式、則汝父之愛、可得而解焉。然後於其德、爲無違此汝之孝也。詩曰、

蓼々者莪 匪莪伊蒿 哀々父母 生我劬勞  
蓼々者莪 匪莪伊蔚 哀々父母 生我劬勞  
父兮生我 母兮鞠我 拊我畜我 長我育我  
顧我復我 出入腹我 欲報之德 昊天罔極

此外長い文句があるが略して置く。要するに東里兄弟が漂泊流離の間に親の恩の廣大なることを自ら深く感じ、又其愛兒に此恩の大きなことを知らしめんとする親切惻篤の情は文中に歴々として現はれてゐる。若し芳子にして此文を讀んだなら、必ず泣いて其徳に謝するであらう。如何に親不幸な人物でも此文を讀んで泣かぬ者はあるまい。吾人は此文を以て佛の口づから宣り給ふ大慈大悲の御言と思つて、實に難有く頂禮するのである。而してこれも亦逆境の賜として欣ぶ外はない。

三十四、逆境は信を生ぜしむ 逆境は信仰の母である、佛教に北州といふて須彌山の北にある國の人民は壽命も長くして中天なく、衣食にも充足しつゝあるから、菩提心を發さぬ、依て佛は北州には出世せぬ。之に反して娑婆世界の人は壽命も短かく、諸行無常の態ないう有様を目撃して居るから、菩提心を起すに適したる器である。依て佛は此娑婆世界に出世して法輪を轉すると云ふ傳説がある。此傳

説の眞偽は兎も角として、其中の意義を考へて見ると、つまり、順境の人は信仰に入り難い、そこで縁なき衆生は佛も度し難い、けれども逆境の人は信仰に入るべき因縁が多いことを示したものである。始めより終りまで順境にのみ居た人が信仰に入つた例は古今に無い。必ず多少の逆境を経て信仰に入るのが常經である。されば逆境は佛が入信の方便として吾人に與へ給ふものと難有く信受するがよい。釋尊は淨飯王の子で榮華の中に生長なされた御方で何もかも順境に居られたやうに思ふは大なる謬見である。予の意見に依れば釋尊は早く母后に死に別れ給ひ、繼母の手に人と爲つた、不幸の御方である。これが釋尊出家の大原因を爲したに相違ない。多くの學者が釋尊出家の原因を種々に説明して置くが、予は一も信すべき理由を發見せぬ。人間としての最大不幸は母に早く別れることである。此不幸、此逆境が釋尊をして大聖たらしめたる端緒を開いた。我宗祖道元禪師の如きも、早く慈父に別れ給ひ、間もなく復悲母にも別れ給

ひたる孤兒である。此不幸と逆境とは曹洞宗を日本に開くべき端緒を興へた。各宗の宗祖、派祖、高僧大徳、乃至篤信の居士等大概逆境が縁と爲つて信仰を獲得した。今日も、今後も、未來永久この通りである。何となれば逆境は吾人をして眞面目ならしめ、吾人をして人生の眞趣に悟入すべき良縁となるからである。

予が昨年の夏、山陰に巡教の歸途、境港から坂鶴丸に乗つて舞鶴へ来る時、船中にて一人の乗客に親しく物語をしたが、此の人は如何にも瘠せ衰ひて居るので、予も同情の念に耐へず、互ひに身の上話をしたが、彼は石州大森の人で數年前に最愛の妻に別れた、其時にはさして哀しいとも思はずに日を送てゐたが、妻が片身の二人の小供が母を慕うて泣くのは断腸の思ひがした。然る所ト風邪の如く感じた病氣が、次第に重くなつて醫師の診定で肺病らしいといふ。嗚呼、妻に別れても、此二人の子供のあるので多少慰みにも爲つたが、今我身が不治の病といふ肺病に罹つては最

早助かる氣遣はない、此病の爲に最愛の妻の後を追ふて黄泉に赴くことは何とも思はぬが罪も報いも無い幼き小供を路頭に迷はせることかと思へば腸も断ち魂も飛ぶの想ひがした。さて此上は療養をして一年も長く生き延びて小供等の爲に計を立つるより外に仕方は無いから、醫者にかかつたが、はかばかしく治らぬのみか、日に衰弱する計である。そこで一層のこと出發生が好からうと思ひ、温泉に行つたが小供等が留守に淋しがるので、それも長くは出て居られず、已むを得ず歸宅するとなつて、病身を俥に乗せて我家を指して還る途中、日も暮れしんとする黄昏の頃、前方より小供が只一人でトホトホと歩いて来る様子であるから、何處の子か知らぬが、可愛相に只一人山路を辿り來ることと、近づいて之を見れば、何ぞ計らん、我兒が己れの歸るを喜んで、途中まで出迎に來たのであつた。其時父子は唯手を携へて涕にくれ一言も發することが出来なんだ。

斯様にして心配に心配を重ねたる結果は徒らに病氣を重くするばかりであるから、朋友の一人に禪僧があるので、此人に就て養生の法問ふて見やうと、訪問して尋ねて見ると、其には此書物が宜しからうと一冊の書物を貸してくれた。家に還つて繕いて見ると自隱禪師の夜船閑話で、其中に自隱禪師も修行のをり、肺病の如き疾に犯されたが、仙人のやうな人から養生法を聞いて全快したことが記してある。そこで坐禪をするが宜しからうと思ひ、毎朝静坐して深呼吸を試みた所が、非常に効が現はれて、今では元氣を恢復して、殆んど病氣も善くなつた様な心地がする。而して今回は海上の空気に觸れて一層健康に爲るやう船に乗て來た。

との話しに予も大いに同情を表して、猶ほ進んで安心決定するが肝要なるを説いて、それより親密になつて天橋を見物し、大阪まで同伴して來たことであつた。予は同氏より名刺を貰ひ受けたが何れへか旅行中に遺失して、其名を知る機會を失うたを残念に思ふ。定め

て同氏は今尙ほ健全で子供等と歡喜の生活を送つて居らるゝならんと信じ、潜かに佛天の加護を御願申して、決して忘却せぬ次第である。斯様な譯で逆境は入道の方便となること疑ひない。

世間には子供に死なれて憂悶して病をなす人は澤山ある。併しこれは信仰も修養も足らぬからである。何となれば先づ小供の方より觀るも、吾人が前章に説いて置いた通り、我日本人は動物學上の理屈から考ひて、百廿歳や百廿五歳は活きられる譯であるが、それは活きられる萬一の機會があると云ふだけで、我國開闢以來今日に至るまで、百廿歳乃至百廿五歳まで生きた人は、片手の指を折る程もない。之に反して母親の胎内で死亡する小供は日に月に幾千人あるか知れぬ。されば茲に一人の小供が母の胎内に宿つたとすれば其子は生れ落ちて百廿五歳まで活きべき運命を持つと思ふのが確實か、又之に反して胎内で死亡する運命を持つと思ふのが確實かと比較考盪したなら、何人も其子は胎内で死ぬが多分らしいと斷するであらう

さすれば其子が胎内で死せずして、兎も角も天日の光明を見て、一日なり半日なり活きたとすれば、暗い處から暗い處へ往く世間幾多の小供よりも幸福である。且つ一二年乃至六七年も生存して両親の慈愛を受けて浮き世の荒い波風にも苦しまずして死んだとすれば實に幸福の上の幸福である。また親の方から之を見れば、小供は親の分身であるから、小供の死ぬのは小供が我身に代つて死ぬと同じである。若し親より先に死ぬやうな病身の小供を遣して我身が病死したら、それこそ大變な不幸であらう。さはなくて小供が先に死んだのは兎も角も結構に相違ない。且つ小供の死亡によつて人情の眞機に觸れ、我親の情けも深く身に染み、佛の恩の宏大なることに心つき、菩提心を發したとすれば、死んだ小供は善知識である。故に小供に先立まてて哀しい、つらいと思ふ無用なる追憶を捨て、諸佛菩薩が我子と爲つて生れ給ひ、方便して我を佛道に導き給ふのであると思つて喜ぶがよい。我子は菩薩の生れ代りであると思へば其命日

の供養にも一層難有い感じがする。一切衆生一人として佛の子ならぬは無ないから、我子を以て菩薩と爲すも、少しも不合理の事でない。詮なき事を懐うて、クヨ／＼として日を送るは脩養なき人のすること、憐あはれむべきである。死んだ子の胎を算へる程、無用なる妄想はない、斯様な妄想を捨て、正念に住せしめん爲に釋迦如來も五十年の説法をせられたのである。

第五章 不如意の妙趣

三十五、人生は不如意ならざるべからず 人生は不如意の事のみ多い、今日は晴天であつて欲しいと思へば雨が降り、何卒一雨欲しいと思へば晴天ばかり續く、悪まれ者は世に横行し、可愛がらるゝ者は世に用ひられず、極めて金の必要な人には金がなく、有り餘る人の處へは金が自然と集つてくる、美しい伶俐な娘は病身で、醜い莫迦な野郎は風さへひかぬ、別れ度もない人には早く別れ、来ずとも好い奴は毎日来る、小供が欲しいと思ふ人には子ができず、無くもがなと思ふ貧乏人は小澤山、花があれば嵐しがあり、月があれば雲がある。そこで迷へる者は一層のこと月も無く花も無かつたなら、愛惜の心も起らぬで好からうと思ふ。是に於て、

世の中に絶えて櫻のなかりせば  
はるの心は開けからまし

の嘆を發するに至る。併し翻て考ふれば此不如意が何より結構なのである、何となれば人生が意の如くなつては吾人は一日も安閑として居ることはできぬ。若し他人が吾人を嫉んで彼奴病氣でもすれば好いと思ふと、吾人が直ちに病氣になり、彼奴早く位地を失へば好いと思へば、吾人が直ちに位地を失ひ、彼奴死ねば好いと思へば、吾人が直ちに死するやうでは危険千萬である。併し病氣するには病氣するだけの原因結果の法則があつて病氣し、位地を失ふには位地を失ふだけの原因結果の關係があつて位地を失ひ、死ぬには死ぬだけの原因結果の法則に従て死ぬので、人間の我儘なる思惑の通にならぬのが妙である。

天氣に就て之を言へば甲は今日は外出するから晴天であれば好いと  
いひ、乙は此頃は乾き過るから今日は雨が降れば好いといふ、丙は  
紙鳶を飛ばすから今日は風が吹けば好いと云ふ、丁は雪見がしたい  
から今日は雪が降れば好いと云ふ、戊は午後に散策するから午前は

細雨で塵を拂ひ、午後は快晴と来れば好いと云ふ。斯様に勝手な熱を吹いてゐる人間の思ふ通りには、如何に御心好の天道様でも出来ぬであらう。即ち氣象の變化には一定の法則があつて古今不變で、人の注文通りにならぬが妙でないか。

また人の欲望は絶えず變化して底止する所を知らぬから、思ふ通りの欲望を充足しても、更に他の欲望が起つて不如意の嘆を發する。されば人間として生れてゐる以上は如何に他人から羨望されるやうな境涯に居る者でも不如意の感は深いのである。

現代我國の富豪名は殊更に避けて言はぬの一人が先般歿したが、其人の妾があつて、最早老婆と云ふ程では無いが、姥櫻の方である。主人の歿後、従前の通り妾宅に住んで、本家から立派に生活費を給せられてゐる。身に備はれる徳があるではなし、腕に覺えたる技倆があるではなし、故主人が其面貌を愛したといふだけで、何の効も無いのに有福に生活して、殆んど無盡藏なる財源にあり

ついで居るのである。そこで出入の植木屋が或日庭仕事のをり、羨望に堪へずして、彼女に向て、貴女のやうに仕合の好い御方はまたとありますまい、旦那の存生中榮華を極めたのみならず、御他界の後までも斯く立派にして貰うて何一つ不自由なく御暮し爲され、何といふ冥加なことで御座りませうと云ふと、彼女は涕を流して、いや／＼私は斯うして養はれてゐるのは忌やで／＼仕方がない、旦那の歿くなつた後は、番人の老爺と飼猫の外は人間らしい人と交際することもできず、三百六十五日クネンとして爲ることも無く、いとしい親の顔も見られず、御友達や、若い男は猶さらの事、我身で我身が自由にならぬ、これか本統の御慈悲の地獄に落ちたのでせう。斯んな境涯よりか、如何に貧乏でも夫と呼ばれ妻と呼ばれて、手鍋さげても自由にしてゐる世間の人が羨しいと云うたとの話しである。

さすれば人の境涯は如何に善くとも知足の心がなければ、いつでも



不如意の嘆は止む時はなす。

思ふ事一つ叶へばまた二つ

三つ四つ五つ六つかしの世や

これでは際限が無い、際限の無い人の思惑の通りならぬのが、即ち宇宙に法則あり秩序ある所以である。此法則と秩序とは佛の意志其物であつて吾人は如何にしても之に服従せねばならぬ。吾人にして神の意志に服従して、其分に安んずれば觸處くが極樂である。故に吾人は敢て云ふ、人生は不如意ならざるべからずと。

昔し狂歌師の元の木阿彌が江戸の麻布邊を逍遙した時、とある稻荷社の神木に人の兩眼を畫いた紙を貼り、釘を以て兩眼を打附けたのを見て、無理な祈願を籠めて人を咒ふ奴があると思ひ、直ちに狂歌一首を其側に書きつけた。

目をかいて祈らば鼻の穴二つ

耳でなければさくことはなし

すると其夜に入つて例の祈願主が深更に稻荷社に来て、木阿彌の歌を見たのであるが、今度は耳を畫いて神木に釘づけにしてある。木阿彌は再び筆を執つて、

目を耳へかへすくも打つ釘は

つんぼう程もなほさかぬなり

と認めて置いた。祈願主も之を再び見たが、今度こそさくやうにと、藁人形を造つて全身にピン／＼釘を打つて置いた。木阿彌は之を見て

稻荷山さかぬ祈に打つ釘は

ぬかにゆかりの藁の人形

と認めて還つた。これには祈願主も往生したものか咒ふを止めたとある。

斯様な我儘勝手な考を以て人を咒詛するやうな者の意の如くに浮世が爲つたなら如何であらう。人生は混亂して名状すべからざるに至

る、ざるを人生は不如意で秩序と法則とに支配せられ、佛の意志が吾人を庇護し給はるは何たる幸ひのことであらう。これ人生不如意の賜である。

三十六、不如意中の慰安 吾人の宇宙は目下或完全なる状態に向つて進行しつゝある。人生も其通りで完全なる状態に向つて進みつゝあるされば人生の現状より見て随分意に充たぬ點もあらうけれども、それは人生の狭い部分、人生の短い間にのみ眼をつけて見るからで、廣く眼をつけ、遠く眼光を放つて人生を遠觀すれば善は惡に勝ち、義は不義を征服し、精神は物質を壓倒し、文明は野蠻を凌駕し、慈悲は殘忍を驅逐して人生を完美の情態に導きつゝある。即ち佛の心は絶えず人生を完美に導きつゝあることを信ずることが出来る。此信仰さへあれば目前の利害や榮辱に心を奪はれずして遠大なる事業に従事することが出来る。哀しい哉吾人の近眼なる、個身を以て我と誤り、個身の一生を以て我の一生の如く思つてゐる。そこで人生

は一個の我の開展なることを知らず、僅か五十年の一生だけを目的として利害を打算するから、佛の冥護もない、因果の道理もない、世は只無慘なる生存競争ばかりであると思ふに至る。

凡そ善因に善果あり、惡因に惡果あり、正義は最後の勝利者であるとの信仰ほど吾人を慰め、吾人を勵まして遠大なる志望を懐かしむるものはなく、人生は一個の我の開展であると了知する程吾人をして希望と光明の道に入らしむる者はない。人生が不如意の如く見ゆるのは、人生に因果の法則が嚴然として存して居るからで此因果の法則は道德界にも行はれて居る、これが善因善果、惡因惡果の事實である。善因善果惡因惡果のことを兎角世人は誤解してゐるやうであるが、這は善いと知つて作した行爲は必ず其人に快樂幸福の報いを與へ、惡いと知つて作した行爲は必ず其人に不快不幸の報いを持來すとの意である。古人は仁者の天にして逆者の壽なるを見て罪福もなく因果も無いと思ふ人があるから三世因果三時業報と云ふ六つ

かしい事を説いて示された。併し吾人は右様な六つかしい空漠なこ  
とや、實驗のできない幽界の事を引き出さずとも因果の理は明瞭で  
あると思ふ。

先づ古人が常に擧げる例に就て論じて見やう。孔子や顔回は善人で  
あるが、終生其志を得ずして前者は喪家の狗の如く、後者は陋巷に  
天死した。之は現世では悪をせぬけれども前世に作した悪業に依て  
斯の如くぢや、盜跖は大悪人ぢやが前世に善業を積んであるから現  
世に於て幸福を得たのである。古人は以上の様に考ひて安心したも  
のであるが、吾人は之より明白に因果の事業を指摘することが出来る。  
先きに一言した通り、善因善果悪因悪果とは善と知つて行ふ時は其  
人に幸福が報ひて来る、悪と知つて行ふ時は其人に不幸が報ひて來  
ると云ふ事である。孔子や顔回は善い人であるから、一生幸福に暮  
すことができた。孔子を以て不幸の人と思ふのは大なる誤解である。  
幸と不幸とは位地の上下、人爵の有無、金銀の多少などで計ること

のできる者でない。世には錦を着たる乞食もあり、襤褸を着けた天  
子もある。孔子は位を得ぬから不幸ぢや、金が無いから不幸ぢやと  
思ふは孔子の何たるを知らざる俗見である。顔回とても其通りで、  
陋巷にあつて其樂みを改めずとある。彼は其道を樂み、其學を喜ん  
で、少しも物質の缺乏を意としたものでない。人の幸福とし快樂と  
する所は其教育や習性や目的に依て其種類を異にする、位階さへ具  
れば幸福と思ふやうな俗物や、金穀さへ倉庫に充つれば幸福と思ふ  
やう様な俗物を以て孔子に擬するは無理でないか。釋尊とても其通  
りである、萬乘の寶位を棄て一個の乞士として一生を了り給ふたが  
少しも不幸ではない。それが釋尊の本懐で却て非常なる御満足を以  
て娑羅雙樹の下の屋根も無い處で御入滅になつた。また壽命の長短  
などは幸不幸を計る尺度には決してならぬ。何れの點から考ひても  
孔子や顔回や釋尊を以て不幸にして憐むべき人物と認ることはでき  
ぬ。即ち彼等は善道を守つた結果、一生天を怨みず人を咎めず大安

心をして幸福に生活し、人を教へ他を戒めて其天職を全うしたのである。且つ後世の人心に大影響を及ぼし、幾千萬年の後まで崇拜せられ、其人格は未來の人心に宿つて活き／＼してゐるでないか。又彼等の事業は人生に幸福なる結果を來しつゝある事は争はれぬ所である。以上は善因善果の場合であるが、惡因惡果は其反對と見たら好い。假りに桀紂を以て惡人とする、彼等は其惡行に由りて、萬衆の富を享けつゝ、實に淺ましき境涯にて其日を送り、且つ其國は滅ぼされて祖先の名を汚すのみにあらず、幾千萬歳の後までも惡王の例に引き出されて汚辱を永久に流したではないか。

果して然れば善業に幸福の報ひがあり、惡業に不幸の報ひがあると云ふは疑ふべき餘地は無いが念の爲に更に疑はしい一例を引かう、阿部豊後守忠秋が將軍の御名代として三條山増上寺へ墓參のをりから、途中に捨子のあるを見て、憐れに思召して拾ひ上げて養育せられた。然る所豊後守が再度墓參になると、復たしても其途中

へ捨子をした者があつた。これ明かに市民が其恩に酬れたので其だ以て不届の至りである。

斯様の例を見ると阿部公の慈善的行爲が市民の不心得を獎勵して善因に惡果が生じたやうに見なす人がある。これ亦誤解である、何となれば阿部公は慈善を行つて其心に幸福を感じて善報を得た、後世の人も此人の心を心とすれば世の孤兒や、捨子に同情することができて人生全般にも幸福を來す。また阿部公の通過する路へ故らに捨子をした市民は己れの心の邪曲より捨子てふ鬼のやうな事をして、憂怖と良心の苦悶とを實驗し、且つ罪なき我子に難儀をさせ、延いて人生に不幸の結果を誘起するに至つた。これ明かに惡因惡果である。阿部公は毫も此惡人の爲に惡報を受くる謂れがない。かくして吾人は因果の空しからざる事を信する時は目前の小利害に眩惑せずして遠大なる希望を以て満足して不如意なる浮世に慰安を得ることが出来るのである。

三十七、不如意中の樂み 吾人の幸福と快樂とは客觀的に外部に存する者でなく、主觀の内部に存するものである。されば高位高官に升ればそれで幸福のやうに思ふは俗見の太甚しきで、福澤諭吉先生の如きは無位無官を以て樂みとし、自ら平民を以て安んじてゐられた。故に其門に出たる小幡篤次郎先生の如きも無位無官を喜んでゐた。

或時恩田五策といふ男が小幡篤次郎氏に向つて、先生は大府肥滿して居らるゝが、何貫目ありますかと問ふた。小幡氏は答へて、十八貫あると云ふ。恩田。いやさうは無い、先生はいつも十四貫さりでせう。何せと云ふに先生は何時も無官(六貫)、頭(かぶ)がやかんで、合せて十四貫ですと云ふた話がある。

かく無位無官に安んじて居れば、幸福は自ら其中にある。龜田窮樂は書を善くした畸人であるが、酒さへわらば自らも飲み人にも飲ませて樂みとして居た。而して貧困を以て少しも意とし

なかつた。彼の句に

正月は只幾歳も面白し

とあるなど、如何にも淡泊にして謂ふに言はれぬ趣がある。またうかくと我宿へ来る春いとし

は彼が眞面目で貧に安んじ逍遙自適してゐるさまが見える。

これ幸不幸は貧富を以て測量すべきものでない確證である。

衛工の巨擘と謂はれたる應舉に向て或俗物が、先生の名は應舉といふ二字だけで肩書が無いから、威光が薄い、向後は肩書を附けたら宜しからうというた。すると應舉は己れにも肩書があるとして、

日本鍛冶宗匠來伊賀守藤原金道東隣應舉

と記したさうである。

此筆法で行くなら忽滑谷快天なども肩書がある。

大日本帝國政府内閣總理大臣正三位勳一等侯爵桂太郎  
妾御鯉の宅と程遠からぬ忽滑谷快天

斯様な肩書などに浮き身を獲す者もあり、應樂のやうに一向無頼着の人もある、畢竟不幸は人間の腹にあると承知せねばならぬ。更に吾人の考察を要する點は吾人の行爲が善惡共に長く人生に其影響を及ぼすことである。人間の祖先が四肢の分業をして下肢を以て歩み、上肢を以て捉るやうにした結果は今日吾人が手足の差別を形成した。また祖先が頭腦を使用した結果は吾人をして諸動物中比較的にも最も頭腦の大なるものたらしめた。古へ何人が野生の米麥を食ふ事を始めたか知らぬが、それが今日吾人が米麥を食ふ結果となつてゐる。古へ何人が麻や木綿や絹を以て衣を造ることを思ひついたかは知らぬが、それが本となつて吾人人類は永久衣服を用ひるのである。古へ何人が酒を創製したか、何人が喫煙を始めたか知らぬが、其影響は何時止むか解らぬ。東洋では何人が禮儀として叩頭するところを始めたか、西洋では何人が握手の禮を始めたか、此二つも永久に吾人を支配してゐる。アラインスが書いた文の中に下のやうな譯

があつたやうに記述してゐる。

支那にホナと云ふ男があつて其子ホボと共に細い煙をたて、居たが、ホボは未だ頑是ない惡戯兒であつて、父のホナが山へ薪を伐りに行つた後で、獨り爐の側に座つて火を玩弄物にして遊んでゐた。そのうちに火が障子に燃え移つて家は全く焼けてしまつた。併しホボは少しも心配しない、家が焼けたら復父が建てくれると思つてゐたが、父が平生大事にして飼つて置いた豚が二三匹此火事で焼け死んだ。此豚を焼き殺しては父が定めて怒るであらうと心配した。事によつたら、未で生きてゐはしないだらうかと思ひつゝ、豚の死んだのを指で押して見ると豚は好く焼けてゐて、其焼けた肉片が指に附着したので、熱ッとして口へ指を入れる拍子に焼けた肉が口に入つたから、ムシヤク食うて見ると非常に甘い。支那では此時まで豚肉を焼いて食ふ事は絶えて無く、皆生肉の儘で食うたのである。ホボは生れて始めて焼いた豚肉を食うた

ので、餘り甘いから、頻りにハグ／＼やつてみた。さる事があらずとは夢にも知らぬホナは山から来て見ると我家は焼けてしまつて、ホボが焼けた豚肉を食うてゐるので、其驚きは一方ならぬ。ホボ、御前は何故其様に汚い物を食ふ、焼けた豚を食ふとは何と汚い奴ではないか、早く止めろ、止めぬと此通りぢやと云つて、大きな棒でホボの背を打つて／＼打ちのめしたが、ホボは一生懸命に豚に食いついて離れる様子もない。其中にホボは焼けた豚肉の熱いのを捉つて、御父さん、其様に言はないで、少し豚を食うて御覽と云ひつゝ、ホナの掌の上へ載せたので、ホナは熱ッと思はず其手を口へ入れる拍手に肉片が舌に當つて甘かつたから、其儘之を食てしまつた。それからホナもホボと一處になつて焼けた豚肉を皆食ひ盡した。此事を見聞した近隣の人々は非常に驚いて、天地開闢以來焼いた豚を食うといふ事は聞いたことがない、ホナ親子は實に汚れた事をする。彼の様な汚はしい者と吾々は一村の

中に住んで居ることはできぬといふので、此事を裁判官に訴へてホナ親子のものを放逐して貰はうとした。裁判官もこれは前代未聞のことであるから、大いに驚いてホナ親子を取調べて見るとそれに相違ないと云ふ。其時ホナは豫て期したる事であるから、豚の焼肉を準備して行つて、不意に裁判官の手の上に載せた。裁判官も熱ッと云つて其手を口に入れる拍手に肉片が舌に觸れて甘いと感じたから、其儘に食うてしまつて、さて焼いた豚は食うても差支ない、甘いものぢやから各々焼いて食うが好いと判決の言ひ渡をした。そこで一村の人民は各々我家に歸つて豚を焼いて食はうといふので、彼處でも此處でも我家に火をつけて火事を起して豚を焼いて食うたといふ話である。

アディンが此物譚は人の食物の偶然なる事より發見せられたるを示して餘りある。思へば始めて章魚や海鼠や、山椒魚などを食うて見た人は大膽不敵なものである。斯様に偶然にしたことでも其結果

は人生に永く其新影響を及ぼすものである。況や吾人が善と知り悪と知つて行ふ事をや。要するに吾人の行爲が、佛の心に契ひ、天地の公道に違ふときは吾人は天地の化育を助けるのである。換言すれば佛が吾人を通して其大慈悲を實現し給ふのである。此確信は大なる勇氣を生み、大なる勇氣は吾人をして目前の毀譽や利害に醒醒たらずして回天の事業を奏せしむる力がある。如何に人生は不如意なりとも、最終の勝利は此確信ある者に與へらるゝことを知らねばならぬ。

三十八、不如意中の如意 列女傳の語に

徳は不祥に勝ち仁は百禍を除く

とあるが、如何にも其通りで、

江戸の通町邊に住んでゐた針師で久齋といふ人は、湯島天神へ參詣に往く途中で、草履が切れて因つたが、幸ひ神田のある家から一足の草履を貰うて參詣を済し、歸途に件の家の前にさしかゝる

と家内は大混雜をしてゐる。立寄つて尋ねて見ると此家の子供の咽喉が腫れ塞つて今死んだといふ騒ぎである。そこで早速久齋が針をしてやると病人も蘇生して、間もなく全快に越いた。

斯の如き事は少しも珍しくない、神佛の冥護は必ずあるものである。大内青樹居士の話に

今回大谷派本願寺の三門を一建立に寄附したいと云つて、大枚十萬圓を捧げた、江州神崎郡位田村の財産家松居久右衛門氏の如きは、其祖先に感心すべき逸話が傳へられて居る。其は久右衛門氏よりして八代前の祖、久次郎と云ふ人のことであるが、其人が寛文四年九月十六日に江州武佐驛から鏡山へ行く途中、小堤村と云ふを通り掛ると、とある路傍に一つの布袋が落ちてゐる。拾つて見ると中には金があるらしいので、如何なる人の落したものは知らんが、嘸かし心配して居るだらうと云つて、袋を棒の尖につけ、背負うた藁包へ縛つて歩いて居ると、一人の旅僧が向ふから



息もせき敢へずやつて来て、「失禮ながら貴方の持たる、其袋は拙僧の落したもので、して其袋には、金子七十兩餘と他に數通の書類が通入て居るので、其れを失つた拙僧は非常に當惑して居た處、幸ひ貴方に拾はれたので、再び我手に返るとは誠に忝い次第で御座る」と云つて手を摺りながら近づいたので、久次郎は「拙者も御覽の通り行商の身、時には旅で金を失つて難澁した覚えも御座る、落した人の心中を察し、如何にもして其主へ御返し申さうものとかくは人目につくやう、棒に著けて居たので御座る。が、此所は途中のこと、聞けば貴僧も上方へ行かれるとあれば、今夜拙者と一緒には泊り、宿屋で袋を改めた、上に御返し申さう」と云ひ、かくて二人は天津へ行く道すがら、互に身の上話しをした。久次郎が、自分は元大阪の笠商人で、旅から旅へと行商し、今歸途を伏見に出て、更に夜船で歸阪しやうと思つたが、かゝる都合で、遂に今夜天津泊りに決めたことを語れば、僧も、己が名

を俊恵といふたことや、住寺の神宮寺と名づくることを告げ、今度心願あつて、播州赤穂から熊々江州の多賀明神に參詣し、今日歸途に小堤村で金を失つた次第を語つた。する内二人は天津へ着いたので、旅籠に草鞋を解いた。食後久次郎は僧の言に違はぬ金子と書類が袋にあつたので、早速返すと、僧は大いに喜び、其中から十兩を取り出して紙に包み、「聊かながら御禮の印で御座る」と云つて久次郎の前に出したが、久次郎は、「俗は僧に財を施すのが道、僧から俗が財を受けるとは飛んだことで御座る」と云つて固く辭するので、僧も詮方なきに「然らば拙僧は今八人の弟子が御座るにより、歸山したらば其々に貴方の爲に、壽命長久子孫繁昌の程を本尊に祈請し、以て今回の御恩に報じ申さう」と厚く禮を述べ、翌朝僧は久次郎と別れて去つた。爾後、久次郎は居を江州位田村に移してから、不思議にも家門は日を追うて榮え、子孫は年に従つて賑はひ、遂に八代目の孫、即ち今の久右衛門氏の代

になつては、其富巨萬を重ねるに至つたのである。で氏は是れ全く祖先久次郎の行つた陰徳の賜であると云つて、去る明治廿九年、自ら行いて播州赤穂の神宮寺に祖先の碑を建て、以て永く感謝の意を表せられたといふことである。因に今現に江州蒲生郡池之脇村長壽寺には、神宮寺の俊恵が其際書き遺したと云ふ一書が傳はつて居て、前述の次第が詳かに記され、最後に、

愚僧不及申、弟子人人有之候間、右御返報の儀は、永代護摩供修行屹度相違無之段請合候得者、久次郎殿可被致大慶候、事餘り不思議の因縁、予兼て伊勢天照皇太神宮信仰の事ゆえ、則御祭禮の日に當て、右の始末難有因縁ゆえ、此一巻に書記し置、永代護摩供可致修行者也。

播州赤穂仙門

寛文四年甲辰年九月十六日 神宮寺俊恵  
と云ふ文句が書かれてあるといふことである。

これ善根が吾人に直接幸福なる報ひを興ふるのみでなく、永く吾子孫と他人とを利濟する活きた實例である。

長門の國の角力で鬼丸と云ふ者が或る盲人と道伴になつて京都へ上る途中、盲人の多額の金を持つてゐることを知つて、ふと悪心を起し、鈴鹿山へ掛つて來た時に、突然後から縊殺さうとすると、盲人は懸命に其手に絶つて云ふに、貴様は今迄親切らしく見せかけて此處まで來て、己れを殺して金を取る氣か、人非人め、死んでも決して此恨みは報いてくれると見えぬ眼をむき出して云ふた。鬼丸は嘲笑つて、己れ座頭の癖に死んで幽霊にでもなる氣か、幽霊になつたつて、眼が見えないから見當がつくものか、愚圖く云はずに往生をしてしまへと毒口をつく。盲人も今は早致し方もないので、如何にも往生したやうに見せかけて、哀しい聲でいふには、それなら貴様は如何あつても殺す氣なら仕方がない。しかし今迄道伴になつて仲善くした好みで、己れが死んだ後で、思ひ

出したら、陀羅尼を讀んで回向してくれ、其陀羅尼は

レイロクサン、トウサン、チャウモンノ、キクワン

と只これだけだから、忘れずに回向を頼む。さうして呉れぬと、幽霊に爲つて屹度とり殺してしまふと云ふ。鬼丸は心得たといつて、遂に盲人を縊り殺して金を奪ひ、京都へ出たが、此悪事が早くも役人の耳に入つて、犯人の吟味が嚴重に爲つたが、鬼丸は盲人の首ひ遣した一言が耳に残つて忘れられず、何となく怨霊が身につき纏ふやうな心地がするので、暗い所へさへ往けば怖るゝ念佛を申して、例の

レイロクサン、トウサン、チャウモンノ、キクワン

とやつてゐる。其舉動が如何にも怪しいので役人の目にとまり、能く／＼探つて見ると長門の鬼丸と云ふ角力と知れて直に縛に就いた。鬼丸も餘り速かに犯罪が發覺したので役人に其理由を尋ねると、役人が貴様は犯罪を自白してゐるでは無いか、レイロクサ

ンは鈴鹿山を音で讀んだので、トウサン盗人、チャウモンは長門、キクワンは鬼丸ではないか、此莫迦野郎と云はれて始めて盲人の計に陥つたのを知つて、泣き出したが追ひつかなんだといふ話である。

抑も悪事を行ふは天に向つて唾するやうなもので早かれ晩かれ必ず己の面に返ってくる。

善悪應報の理が解つて佛は常に吾人の本心に宿り、吾人を導き、吾人を守り給ふと知らば不如意の中に在つて如意安穩の樂みを得ること断じて疑ひ無い。

三十九、不知意の境は我儘より生ず 世の中の人が不如意を嘆ずるは畢竟我儘より起る、佛の心は法界に周徧して萬象の法則と爲つて現れてゐる。さるを其法則、即ち佛の思召をも一向に究めずして、我慾ばかり盛んにして望みを遂げやうとする、そこで失望のみ多いのである。若し吾人は萬象の法則即ち佛の思召のある所を究めて、

之に従つて行動したら必ず目的は達せられるものである。迷へる人の思ふには悪い事さへせねば自然と善い事が報いてくる。金も溜り、子供もでき、長命もし人の尊敬をも受け、高位高官に昇れるなどと妄想してゐる。そこで別に悪いこともせぬけれど、何時も貧乏で、子供もなし、病氣もし、人も尊敬せぬと、神も佛も無いものか、思ふやうにならぬ世の中ぢやと啣くちつのである。

悪い事を爲さねば其報いとして、品性が高くなり、人格が完全になり、佛心に契ふから、良心の自由を得る。それが當然なる法則である。さるを我慾を逞うして、悪い事を爲ぬだけのこと、子供も得らるゝ、金も自ら溜ると豫期するは不都合千萬である。斯の如き我慾を逞うして爲したる行爲は善とは謂はれぬ。金を溜めるには經濟上の法則に依らねばならず、壽命を保つには生理上の法則に由らねばならず、皆それく法則があるのに、單に悪い事をせぬからとて、其報いとして直に金も出来、壽命も延ると思ふは大なる迷想である。

如何に善人でも攝生を怠れば病氣をする、職業を怠れば貧乏もする、當然ではないか。此理に通曉して人生に處すれば不如意の嘆を發することは無し。併し宗教上の信仰は發して道德と爲り、また經濟を圓滿ならしむる力がある。これ極めて重要な點であるから、少しく説くことにしやう。

前章に説いてある通り吾人の身心は佛の賜で、吾人の生命も、衣食住も自然界の萬象も佛より出るものであるから、吾人は吾人の身體を我物と思はずして佛の御身として大切にせねばならぬ、又一つには吾人の身體は父母の遺體であるから、何れにしても大切な寶である。古人が

惜しからぬ身をしまるゝ

たらちねの遺し給へるかたみと思へば

と詠じた通り、我身で我身でない、父母のもの佛天のものと思へば

此身が大事になる。そこで攝生も謹んで健康になる。故に佛の難有  
 ことを信すれば自然と健康と爲る。また安心ほど養生になるものは  
 無く、心配ほど養生に害あるものは無い。されば佛の功徳を信じて  
 安心決定すれば自然に養生になつて長命を保つ。さるを根本たる信  
 仰を除け物にして、健康ばかり得やうとし、長命ばかり得やうと焦  
 心る、是を以て健康も長命も得られぬのである。金とても其通りで、  
 吾人の衣食住は佛の賜である、一寸の田地も、一本の草も、一片の  
 パンも皆佛の大慈悲より出ると思へば、此等のものが皆大切になる。  
 一寸の田地も荒して置いては相濟まぬ、一本の草も空しく捨てはな  
 らぬ、一片のパンも難有く頂戴せねばならぬ。古人は皆さう確信し  
 てゐた。

高祖道元禪師は或時近江の琵琶湖の側にて足を洗ひ給ひし時、湖  
 水の水を汲んで洗ひ畢つて残りは再び湖水へ還し給ふたといふ。  
 何んと貴ふべき心掛でないか。禪師は常に三寶の物は大切にせよと

戒められ、飯のことは御飯、菜のことは御菜と呼んで天子様へ差上  
 るものゝやうに敬へと仰せられてある。

天桂禪師は正法眼藏の辨註を御著しなされた時、原稿には故紙を  
 裏返しにして用ひ給ひ、布施を包んだ紙を展べて御用ひなされた、  
 何と難有いことでないか。

信仰ある者は皆是の如くで、

浄土真宗の大徳、蓮如上人は御門徒の進上物をば御衣の下にて御  
 拜み候。又御物と思召候へば、御自身の召物までも、御足に當り  
 候へば御頂き候。

御門徒の進上の物、即ち上人よりの御おたへと仰られ候。御廊下  
 を御通り候て、紙切の落て候ひつるを御覽せられ、佛法領のもの  
 をあだにするやと仰せられ、兩の御手にて御頂き候。

とある、かく一切の物を大切にしたらなら少しも無駄になるものが無  
 い。是に於て富まざらんと欲するも自然に富むやうになる。經濟の

大原は此信仰にありと云うて宜しい。さるを此大切なる信仰は除け物にして金ばかり欲しがるから、金の方で逃げてしまふ。

或人か金を溜る秘訣を傳授するので名高くなつたので、去る慾深い人物が態々訪問して、何卒金を溜る秘訣を拙者にも傳へ給はれと懇願した。すると主人は即刻承知して、先づ傳授料金十圓の受領證を出して、傳授料先拂を要求した。慾深先生も少しく高價だと思つたが、併し眞に金が溜れば十圓の傳授料位はなんでも無いと思ひ回して、早速十圓を支拂つた。それから二階にて秘密に傳授致すから、二階へ上られよと勿體さうに曰ふ。然らば御免と二階に上つて見ると天井より鐵の棒一本吊り下げてあるのは恰も機械體操めいて居るが、其外には何も無い。其時主人の言ふに彼の鐵の棒に飛びついてテラ下りなさるやうと例の口調で命令した。慾深男は命令のまに／＼鐵の棒にテラ下つた。主人が慾深男の直下にゐる板を取除くと、道は如何に光芒陸離として水も滴る計りの

大劍が五六本倒まに樹てある。若し慾深男が落ちたら田樂さしになるは必定ぢやから、彼も大いに膽を冷して、御主人悪戯をしてはいけません、私は金を溜る術を教はりに來たのです、此様な危険なことをして貰うとて大枚十圓出したのぢありませんと泣聲を出しかけた。すると主人は落つきはらつて、いや／＼金を溜ると申す者は中々危険なもので御座る、まづ暫く御辛棒なされ、却説貴君の今握つて御座る兩手の小指を鐵の棒から離して御覽じろ、金を溜る秘訣を御傳へ致すからと云ふ。慾深男も、ちと危険とは思つたが、金を溜めたいが一心で、兩手の小指を鐵の棒から離す、宜しい、次には兩手の薬指を鐵の棒から御離し召され、金を溜る秘術で御座る。慾深先生愈々危険となつたが、此期に及んで主人の命を用ひずは金を溜る術を學び損するだらうと思ひ、止むを得ず言ふが儘に薬指を二本鐵の棒から離した。扱愈金を溜る秘術を御傳へ申すから、次の中指を二本共鐵の棒から御離しあれ。此度

は流石の慾深男も絶體絶命の場合となつた、併し金を溜るには命などを惜んでは居られぬと決心して、百尺竿頭に一尺を進める考ひで中指を二本ながら鐵の棒から離した。そこで彼は二本の拇指と人指指とで圓く金の棒を握りつめて一心にとりついてゐる。主人は一段聲を張り上げて、それ御覽じろ、圓い金を握つたら、命がけて離さぬのが金を溜る秘術ぢや、解りましたか。努めく他言は無用で御座る。かくして慾深男が鐵の棒から卸して貰つた時は全身に油汗を流して居たさうで、さもありさうな話である。信仰てふ根本を忘却して金ばかり溜めやうとするから斯様な妙なことになる。

又或恐かなる男は晨起きには三文の徳があるといふ話を聞いて、いつもの朝寐にも似ず、馬鹿くしく早く起きて、何か道に落ちたものでも無いかと、蚤取眼のしかまで見ると、果してあつた、二三日先きに光る物が見える。近づいてよく視れば十圓の金貨である。

慾深先生雀躍して悦んだ、早起には三文の徳があるどころか、十圓の徳がある、甘い事もある者ぢや、何處の誰が落したか知らぬが、随分粗忽千萬でないかと大平樂を謂ひつゝ拾はうとすると、頭しも冬の寒天で、金貨は堅く地面へ凍りついて居る。容易に離れさうにもない。愚圖くして居て他人に見附られたら一大事、寶の山に入つて手を空ふして歸るやうな無魔なことになるも知れぬ。何とか巧い工夫は無いかと思案して、あるともあるとも巧い工夫がある、己れは今起きた計りで小使がはづんで居る、これを金貨にしかければ、物理的法則で必ず溶る、巧い工夫もあればあるもの、吾ながら知慧のあるに驚いた、昔しの孔明や楠にも、よも此程の知慧はあるまいと出放題を並べながら、腰間より三十二センチもあらんかと思はる、大砲を挽出して、金貨を的として發射した。そこで見る／＼うちに氷は溶けたが、熱度が少しく強過ぎたが、金貨までも溶けたと見えて、見當らぬ。これはと思ふ拍

子に眼が覺めて見れば今のは全く夢で、寢小便ばかり、したたかして居た。されば古歌に

金拾ふ夢は夢にて夢の中

はこすると見し夢はまさ夢

とあるのである。

却説斯様な譯で信仰てふ根本を忘れて單に金銀のみ得たいと思へば寢小便でもするが關の山である。何でも精神の本源から立派になつて、自然と物質上に現れるやうな修養でなくては役に立たぬ。近頃世間の人が一般に金を溜る事ばかり工夫して貯蓄くと二言目には必ず貯蓄といふが、餘り感心したことでない。人をして功利の念ばかり強からしめる傾向がある。利の爲に義を忘れるやうな國民と爲つたら大變である。

ナスキンは富とは物資ではない、富める國とは物資の多い國のことでない、富とは生命である、健全なる生命である。富める國とは健

全なる生命を有する人民の多い國であると公言してゐる。洵にナスキンの言の通りである。物資を以て富として物資ばかり多く集めても其國の人民が利欲の餓鬼では亡國である。

是を以て吾人の一日も早く獲得せねばならぬ者は金でなくして信仰である。吾人の衣食住を始め天地間の萬象は佛より出つるものであるから、一事一物皆大切にせねばならぬ、否、一草一木に佛の不可思議なる智慧と徳相とが現れて居る、勿體ない事ぢやと思ふ敬虔の念があれば、一粒の米も、一片のパンも、一條の糸も、一枚の紙も空しくせぬ。そこで自然と勤儉になる。然るを此信仰を外にして勤儉勤儉と叫んでも勤儉を賣りにでも來たやうで何の効もない。泥や勤儉さへそつち除けにして投機的に金を得やうとするをや。金を追求して謹儉を追求せず、謹儉を追求して信仰を追求せぬ輩は本を捨て末を追ふのである。これを迷倒の凡夫といふ、淺ましいことである。本を捨て末を追ふから、目的が達せられぬ、目的が達せられぬ



から、人生の不如意を嘆ずる、故に予は敢て言ふ、不如意の嘆は我儘より生ず、不如意の嘆は迷ひより生ずると。

四十、不如意の嘆は佛心を知らざるより生ず。不如意の嘆聲を漏す人は内に自ら省みることがなく、外へばかり眼をつけて幸福を外から得やうとし、他人から幸福を授けて貰はうとばかり企てる。吾人の幸福と吾人の富と吾人の寶とは外に在るではない、外から來るでは無い、自心の中にある。佛の大心は宇宙に充滿してゐるから、一切衆生、一として清淨心の無い者はない。柳は緑、花は紅、雀はナツク、鳥はカク、鶴は長く鴨は短く、猫は鼠を捕り、狗は夜を守る、これが清淨心のある證據ぢや、況や人間をや。涅槃經には此心を佛性というてあり、楞伽經や、首楞嚴經には如來藏というてある。名は異れども一つである。儒者には至誠ぢやの、明德ぢやの、良知ぢやのと謂うてある。虚靈不昧の本心で、此心の物にあるを法性といひ、法則といひ、物理ともいふ。此心の天にあるを命といひ、

天則ともいふ。此心の有情にあるを佛性といひ、心性といひ、自性清淨心とも佛心ともいふ。此心の虚妄ならざるを真といひ、不變なるを如といふ。此心は方寸の中にあるかと思へば六合を包んで餘りある、故に妙心といふのである。

此心が吾人の方寸の中にあるから、一點味まざる所がある。此清淨なる心には萬善悉く備つて、少しも不足はない。此清淨心を以て宇宙全般に對すれば油然として敬虔の情が起る、これが即ち宗教である。此清淨心を以て事物を観察すれば理として照さざるは無い、これ即ち學問である。此清淨心を以て君に事ふれば忠と爲り、親に事ふれば孝と爲り、朋友に交れば信となり、夫に事ふれば貞となり、妻に對すれば愛となり、兄に對すれば悌となり、長上に對すれば敬となり、子弟に對すれば和となり、一切の人に對すれば仁となり、義となる。宗教も學問も道德も皆此一心中の中に備つてある。此心の中に幸福もあり、富もあり、寶もある。ざるを此心を味まして外に向

て富を求め、幸福を求め、寶を求めるから不如意の嘆を發するのである。

佛は我等に身體を與へて活動せしむるやうに仕向けてある。故に心臓も、肺臓も、胃も、腸も、神経も、疲れた間も休まず働いて居る。されば活動は生命で、不活動は死である。是の如く佛心を體得すれば喜び勇んで勞働することが出来る。勞働すれば身體も善くなり、精神も壯快になり、不如意の嘆が止む。之に反して役にも立たぬ妄想ばかりして、勞働せぬから、身體も虚弱に爲り、精神も陰鬱に爲つて、厭世觀が起る。故に吾人は忙しい程幸福な事はなく、仕事の無い程不幸な事は無い。ラスキンの語に、

朝起の際、今日一日は空しく費すまじと神に祈れば、神は欣び給ふべし。又食前の祈禱には、此食物は一も不正の手段に由らずして得たる者なりと言ふべし、これ神の欣び給ふ所なればなり。とある如く、佛は吾人をして一日も空しくせず、一片のパンも正當

なる吾人の働に依て得ることを教へ給ふのである。此佛心が了解されたなら、喜び勇んで事に従ふことができるに相違ない。古へより信仰の深い者は喜び勇んで事に従ふから大功を樹てることができた。彼の盲人にして大學者たる鳩保己一は天滿宮を深く信仰して般若心經を讀誦して之を拜するを常とした。彼は志を立て句當の位に昇進したいと思ひ、勉強の傍、般若心經を毎日百巻づつ誦して、百日に及んだ時、正に句當に進むことができた。そこで大憤發をして今度は檢校に立身しやうと思ひ、毎日般若心經を百巻づつ誦して天滿宮を祈り、勉強して遂に二千日目には美事檢校に立身した其後彼は群書類聚と名づくる未曾有ともいふべき書物の大編輯に従事したが、安永八年三十四歳の時より、文政二年七十四歳の時まで四十一年の長きに亘つて、遂に群書類聚の編輯を完成した。此四十一年間、毎日般若心經を誦して其成效を祈つたので、其讀誦した卷數を帳簿に記入したのが今日も残つてゐるが合計百九十

三萬五千卷になる。

實に其絶大なる勢力と信仰の堅固なるには驚かざるを得ぬ。

相州極樂寺の忍性法師、字は良觀といふた大徳は御修行の中にも、大衆の衣服を洗濯したり、僧房の掃除をしたりして陰徳を積まれ、其上に常施院を建て諸の病僧を治療したり、悲田院を設けて多くの乞食を救うたりして樂みとせられた。或時奈良坂といふ所に一人の癩病患者があつて、手足も攀屈して歩むことも出来ぬ。忍性法師は之を憐れに思召して曉には患者を負ふて市場につれ行き、路傍にて乞食をさせ、暮になると復自ら患者を負ふて歸り、自ら患者の汚れを洗ひ淨めて看護し、如何なる夏の暑さにも、冬の寒さにも厭ふことなく親切に看護せられたので、其癩病人が臨終の際に、誓ていふには必ず再び此世に生れ來て此大恩に報ひ奉るとて瞑目した。之を見聞する人々大徳の篤實に感せぬものはなかつた。また寛元元年には先きに物故せられた母親の恩に酬いる爲に

とて、十八個處に施行場を立て一萬八千人の乞食に食物を施した。それより弘長元年に至て關東教化の爲に鎌倉に入り、北條時頼は光泉寺を建て、師を請して住持せしめ、北條長時は極樂寺を營んで開山とした。師は得る所の施物は悉く、或は圓圓の人に散じ、或は寒素なる人に與へ、或は衣服を脱して人に與へ、錢物を頒ち、盲者に杖を授け、乞丐に布袋を製して授け、棄子を拾うて錢を出して乳養せしめ、病馬を集めて治療し、佛名を唱へ、小簡に呪を書して其頸に繫ぎ、文珠地藏等の菩薩を自ら畫いて男女に頒ち與へ、凶年には糜粥を煮て餓乏たる人を救ひ、疫病の時には患者を招き集めて、藥劑を投じて撫活せしむると其數を知らぬ。北條時宗が桑谷の地に療病舎を作て施療したが、時宗が薨去してからは、師が勸財して之を經營し、毎日患者を看護すると前後二十年間にして五萬七千二百五十人を養うた。そこで世人は師を醫王如來と稱して尊敬した。師は是の如く慈心深き大徳であるから日蓮上人

の如きは師の奉ずる律宗を律國賊と罵つてゐたが、師は少しも意に介せずして、日蓮が罪に陥るに及んで、卻て之が爲めに時宗に宥恕を乞ふたのである。師は嘉元元年七月十二日に八十七歳で入寂せられたが、得度の弟子は二千七百四十餘人、白衣の弟子は其算を知らず、本院を結界すること七十九所、伽藍を脩營すること八十三所、佛塔を建立すること二十區、大藏經を納むるを二十四藏、諸國に橋を架すること百八十九、百八十町の水田を寄すること二十二所、道路を修繕すること七十一所、義井を鑿ること三十三、殺生を禁すること六十三所、乞丐に施す所の布衣三萬三千領に及んだ。

(156)

是の如き大功徳を信仰で無くては出来るものでない。吾人は忍性法師の萬分の一なりとも佛恩報謝の爲にして見たいと思ふ。かく思へば不如意などの嘆を漏して不平を云うて居る遠がない。

四十一、不如意の嘆は不徳より起る 人は元來正直なる天性を賦與

せられてあるにも拘はらず、邪曲の徳を造りして、卻て不如意の嘆を發するに至るのである。熟ら天下の事物を觀察して見るがよい、一として不正直のものがあらうか。天は高く、地は厚く、火は暖かに、水は冷たく、柳は緑、花は紅、鶯は必ず正直に法法華經と囀り、雀は忠々、鳥は孝孝と鳴く。其處に何の邪まな事があらうか、何の偽りがあらうか。猫も正直狗も正直、乃至吾人の胃や肺や、腹や頭や、手や足まで正直である。胃の活動にも肺の活動にも心臓の活動にも偽りは無い。さるを吾人は是の如き正直の身體を佛より與へられながら、不正直の事や無理な事を企てるから、遂げられぬ、遂げられぬとて不如意を嘆ずる。誠に困つたものぢや。

若し本心正直の徳に立歸つたなら、安心なものである。所謂奢侈、贅澤なるものは一家の不如意を來す大原因であるが、奢りとは分外の生活で、正直でないから起ることぢや。殊に婦人にあつて、虚榮心が多くて、動もすれば分外なる虚飾をしやうとする。

(167)

山東京傳の家しやうけいに一人の來客があつた、京傳が茶ちやとして茄子の眞燒まきを出すしと、客が

茄子なすびさへ瓜實うり顔かほにまけじとや

油あぶらつけたり紅くまをさしたり

と狂歌を詠よんだ。京傳直ちに答へて

油あぶらつけ紅くまをさしたはよけれども

色の黒くろいに味噌みそをつけたり

と返歌へんかしたさうである。

虚榮こゑ虚飾こゑは却て我顔わがかほに味噌みそをつけるやうなものであるから戒めねばならぬ。

吾人にして若し至誠しじやうの本心に立脚りつかくつて、分に安んじ、足ることを知つて、佛心ぶつしんの廣大くわいだいなるに浴よくしたならば、

元日げんじつや何なにはなくとも親おや二人

てふ如意にぎ満足まんじつの樂たのしみみを享たのむることが出来るのである。

### 第六章 善惡の妙趣

四十二、無理なる善惡の說明 一派の宗教家の中には善惡に對する無理な説明をしてゐる人がある。

善惡は積極的に存在するものでない、消極的のものである。神は全智全能にして純善の者であるから、善惡の存在を許す筈はない、利と善との無い所が善と惡とである。善惡を積極的に存在すると思ふは誤迷の致す所である。

斯様に説明して神の純善性を辯護し得たりとしてゐるらしい。吾人は善惡が果して積極的か消極的か、口頭の議論は暫く措く、右様の説明で果して安心ができるか、否か、疑はしいと思ふ。

例せば貧乏で苦んでゐる人に君は貧乏では無い、金が無いのぢや、富が無いのぢや。富は積極的に存在してゐるが、貧乏は單に消極的のものぢや、少しも苦しむに足らぬ、貧乏を積極的に存してゐると

思ふは君の迷執といふものぢやと説明しても貧乏人の慰安にはならぬ。  
 また病人に對して病氣てふ害悪は積極的に存在する筈はない、病氣は健康の無い所ぢや、君は病氣を積極的にあると思ふから、それが悪い、病氣は元來消極的のものぢやと説いて聞かせても病人の慰安には少しもならぬ。

同様に災難に罹つた人に向つて、君は災難を眞にあると思ふからいけぬ、災難はつまり吉瑞の無い所を意味する語ぢや、君が災難を積極的にあると思ふは神の純善性を信せぬからぢや、それは善くない、災難は消極的のものであるから安心し給へと説いて聞かせても罹災者は安心することはできぬ。  
 苦患も其通りで、現に苦んでゐる人に向て、君は苦みを積極的に存在すると思ふからいけぬ、苦みは樂みのない所ぢや、消極的のものぢやと云うて聞かせても其人の苦痛を減ずることはできぬ。

悲哀とても其如く、哀みつゝある人に向て、君は哀みてふ情を實在すると思ふは大いに誤解である、哀みは喜びの無い所で、消極的のものぢやと説明しても、哀みに沈める人を慰めることはできぬ。  
 されば害悪に就て如何に其消極的なることを説明しても、説明者自身にも満足を與へず、他人を安心せしむることは猶ほさらできぬ。  
 害悪の性質を説明して満足せんと欲する人は古人の譬喩中の癡漢の如くである。大涅槃經に云ふ、

譬へば人あり身に毒箭を被るが如し。其人の眷屬、安穩ならしめんと欲して、毒を除かんが爲めの故に、即ち良醫をして爲に箭を抜かしむ。彼の人方に言く、且く待て觸る莫れ。我今當に觀すべし、是の如き毒箭は何の方より來るや、誰の射たる所ぞ、是れ利利なりや。婆羅門なりや、毗舍なりや、首陀なりや。復更に念を作す、是れ何の木ぞや、竹なりや、柳なりや。其鐵鐵は何の冶の出す所ぞ、剛なりや、柔なりや。其羽毛は是れ何の鳥の翼ぞ、鳥な

りや、鵝なりや、燕なりや。有する所の毒は何より生ずとやせん、自然に有りとやせん、是れ人毒なりや、蛇毒なりやと。此の如き  
 痴人は未だ知ること能はざるに尋で便ち命終す。

毒箭に當れる人が如何に仔細に毒箭の由て來る所を研究しても其箭を抜かぬ以上は苦痛は這れと同様、吾人は害惡の毒箭に就て如何に巧みなる説明を與へても、不幸なる人々を満足させることはできぬ。それより害惡の毒箭を一刻も早く抜き出して一時も早く治療をするが肝要である。

されば吾人の胸臆に如何にして惡心が生じたか、如何にして邪念が湧き出たか、其原因は如何、如何なる理由で佛は吾等の心に邪念の生起するを許したか、社會は如何なれば害惡多きか等の六つかしい研究をしてゐると、其研究ができぬ先きに、吾人は害惡の爲に亡ぼされてしまふ。故に一刻も早く吾人の罪と惡とに打勝つべき手段を講ずるが肝要である。

四三、天災地變の意義 吾人は天然現象が人間に害を與へることが往々あるので、周徧法界の佛の慈悲を疑ふやうになる。併し佛智は不可思議で容易に天災地變の意義は解るものでない。昔しは地震、雷、火事、親爺おやぢといふて、地震や、雷は實に怖るべき害惡の第一に數へられてゐる。地震の畏るべき事は謂ふ迄も無いが、然し地震は地殼の變動より起るので、此變動が無いなれば本來一切の植物も動物も人間も地上に生ずることは無いのである。即ち地球が最初の高熱の儘で存在して、少しも冷卻せず、従つて地殼も生ぜなかつたら、生物が地上に現はるゝ筈はない。地殼が生じて次第に諸生物の生活に適するやうになるには幾多の變動が必要である。此變動より地震は起るのであるから、地震は生物の母で、人間の父である。そこで地震と親爺おやぢと一列に並べたものであるかも知れぬ。地震には右様の意義があるとすれば今後の地震も亦一時人間に害を與へるやうな事はあつても、畢竟は吾人の安全に貢獻するものと信じて差支な

い。要は地震をして存在せしめたる佛の功徳を喜んで、地震に對する無知を除いて、其害を豫め避ける工夫が必要なのである。地震には火山脈の關係する場合が多いが、火山も古へは畏ろしい害悪の一であつた。併し火山などより生ずる微塵は空中に飛散して、水蒸氣の凝結する中核と爲つて、雨を降らす原因となる故、思ひもよらぬ所で、吾人の爲になつてゐる。且つ我國にては火山より硫磺などを採取して其恩恵に浴してゐる。

地震の次に畏るべき害悪の一なる雷は今日では、吾人の爲めに電車となつて吾人に仕へ、電信電話と爲つて使命を通じ、電燈と爲つて吾人を照して雷がなくては夜も日もわけぬ大恩人と爲つた。宇宙に雷のあるは吾人の爲に害であると思つたのは吾人の無知に基因したのである。眞に雷電の意義を了解したなら少しも畏るべき所は無し。昔しは猛獸毒蛇も人間の害悪としてあつたが今日では猛獸毒蛇の皮を剥いて便利なる物を作つたり、彼等を活捉にして見世物にして金

を儲けて居る。洪水とても其通り、之を利用すれば田畑を肥し、生産を増し、富を増進することができる。但し吾人が無知にして其意義のある所を明かにせずして、只管之を畏れるのみであるから、害あつて益がない。涅槃經に

如來慈母育衆生、普飲衆生大悲乳。

とあるから、凡ての自然現象は吾人に佛より賜はりたる大悲の乳と申うて、畏れず、驚かず、喜び勇んで研究して其意義のある所を知つて、其恩恵を享くるが好い。

四十四、人間社會に於ける害悪の意義 人間社會の害悪と云へば欺偽、強竊盜、姦淫、殺人等種々あるが、此等は皆自殺的行爲で、無知なる人々のする所である。苟も社會生活の何たるを了解した人は右様の阿房なことはせぬ。これはつまり人間が幼稚であつて、眞元思案ばかりするから生ずる害悪である。佛は

一切衆生を見給ふこと赤子の如し



で、吾人は皆同胞で、一我の分身であるから、相愛し相助けて社會我を完成するのが佛の思召に相違ない。さるを悪人と稱する輩は無知愚昧にして佛の思召を難有く信受することが未だ出来ぬ。依て佛は此等の無知なる衆生を殊に憐れみ給ふのである。邪悪は必ず其結果として社會に害を及ぼすから、社會の人を覺醒して邪を避け正に就かしむる媒と爲る。また惡を爲したる人々には苦痛を増加して改過遷善の方便となる。加之、悪人と善人と別段性質に差別があるのではない、所謂悪人なるものは、一身一家の幸福快樂のみを企圖して、他人他家の幸福快樂を犠牲にする者である。善人とは一身一家の幸福を企圖するは勿論であるが、他人他家に損害を及ぼす者である。そこで其心理を解剖して見ると悪人は一身一家だけを我と心得て他人他家は其中に包容せぬ。之に反して善人は一身一家を我とするは勿論であるが、他人他家も我として居て、他人の害せられたのを見ても我身が害せられたやうに感じ、他家の災害

を見て我家の災害のやうに感じて同情を表するのである。されば悪人と善人との差別は性質上の相違ではなく、我なる觀念と同情の廣狭にあること明かである。故に予は悪人とは善人の幼稚なる者、小なる善人と呼ぶのである。斯の如く思惟する時は悪人に對して少しも憎惡の念を起さず、佛の思召す通りに、一切の人と親善することができ、又他力に於ては邪惡の事項の中に吾人の活きた教訓を發見して、邪惡を轉じて正善とすることもできる。吾人は人間界に道德の發生したのを大いに喜ぶのであるが、其道德なる者は如何にして發生したかと云へば、野蠻時代から、共同生活の結果、私利のみを計つては社會の爲にならぬことを自覺して次第に本性の善徳を發揮し來つたものである。而して其私利のみを計るは所謂欺偽、窃盜、姦淫、殺人等の罪惡であるから、畢竟するに道德は罪惡の害を防ぐ爲に生じたものである。されば道德も罪惡に負ふ所があると言はねばならぬ。何れの點より考ふるも罪惡は人間社

會に一種の意義を以て發生したる事項で、個體保存と稱する大切なことに根柢を有してゐる。故に罪惡あるを以て人生を悲觀するが如きは大なる迷想である。

四十五、相殺の妙 我宇宙人生には一方に害があると他方に利があつて相殺するやうに組立てられてゐる。これ頗る妙味の存する所で例せば蝶や蜂が華の蜜を採るは一方より見れば華を破壊するのであるが、それが他方には彼等の媒介にて實を結ぶ方便となる。これ破壞と完成の相殺であるが、假りに吾人が華の身に爲つたら、蝶や蜂に蜜を採らるゝを哀むより、其方便で實の成るを喜ぶが至當である。植物が空氣中の炭酸を取つたり、地中より養分を吸収したりするは地中空氣にとつて破壊であるが、それが再び植物が炭に爲つて燃えたり、腐敗して地の肥料と爲る原因である。人や鳥獸の呼氣が炭酸を含んで植物を養ふかと思へば、植物の還す酸素は人や鳥獸の爲になる。水の陸より流れ下りて海に入るは陸上の水を個渴する原因で

あるが、同時にそれが水蒸氣と爲つて陸上に降下する原因である。草は五穀の邪魔になるものであるが、其草が直に五穀の肥料となる。蟲が發生して植物の害を爲すかと思へば、其蟲を好んで食ひ盡す小鳥がある。小鳥が田畑を荒すかと思へば其小鳥を食ふ鷹や鷲がある。鼠が害をすれば猫が之を食ひ、猫が害をすれば狗が之を驅逐する。人間界も其通りで大悪人があれば敏腕な警官が出て之を捕へ、大火事が出来ればポンプの善いのが發明される。水雷が出来れば水雷を驅逐する軍艦が出来る。堅固なる要塞が築かれるれば之を破壊する攻城砲が出来る。病氣があれば藥がある。微菌があれば之を殺す作用が身體にある。飛行艇で敵を攻めやうとすれば之を防ぐべき飛行機も發明される。かくして我宇宙人生は相殺の妙によつて安全にされ、完全になりつゝある。此間に謂ふべからざる妙味があつて、決して悲觀すべきでないと思ふ。

四十六、生存競争の妙味 生存競争も人生の害悪として認められ、生存競争と云へば直ちに悲惨なることを聯想する、併し生存競争は必ずしも悲惨な事のみではない。進化論は吾人に教ふるに生物が劣等より高等に進んで来た歷程を以てし、其間に幾多の生物の滅亡と生存の跡を示すものである。而して吾等人間は目下の處最後の勝利者で地球上には最も新しい動物である。果して然れば生存競争の爲に吾人は今日あるを得たので、生存競争は人間の爲に決して仇讐ではない。

且つや野蠻時代より今日に至る迄、生存競争の爲に勵まされて次第に固有の本性を發揮し來つて、道徳上、政治上、宗教上、學問上、文明の花を開いたものである、此點から観て生存競争は文明の恩人であると謂はねばならぬ。

國內に多くの小國があつて戦闘があり、戦闘の結果は平和と爲つて、遂に統一して一國民となる。生存競争より起る此等小國の戦闘は一

國平和の準備である如く、目下各國民が動もすれば武器を執て起たんとするは頗て世界の大きな平和の準備である、決して畏るゝには足らぬ。故に生存競争は活動の奨励者であると同時に或意味に於て平和の補助者である。

生物は無限に繁殖せんとする欲望を有して居るが、其食物も住處も限りがあつて、彼等が無限に繁殖するを許さぬ。是に於て乎食物住處の爲に生物相互の大競争が起つて悲惨なる結果を生ずると云ふが普通の考いである。されど予は左様に思はぬ、劣等動物は暫く措く、人間は決して無限に殖繁せんとする欲望は無い、或度に於て有限である。即ち衣食住處が既生の人間に充分なる範圍に於ては繁殖せんとする欲望はあるが、それ以上に繁殖せんとする欲望はない、否、人間の繁殖を制限せんとする欲望が生じてくる。尤も繁殖の欲望は性慾を根柢として居るが、これとても無限といふ者でない、或度に於て有限である。現在の人間の有様では地球だけが其棲息すべき場

處で他の世界へ移住することは不可能のやうである。しかし此狭い地球でも人間の住む處は澤山餘つてゐるし、食物とても今日より多量に産出することはいくらでも出来る。今後如何に人間の數が増加しても其増加は生活の可能なるだけの増加で、或度に至れば人類は自ら其増加を制限する力を有して居るから心配にはならぬ。世界に人間が充満して成田山不動尊の年越の豆播きの時のやうに人が人の頭の上を歩いたり、人と人と相食ふやうには漸じてならぬ。人間の道徳は相助け相感むことを教へるのに反して生存競争は容赦なく、弱者を壓倒し、不適者を滅ぼすことを教へると云ふ説もあるが相助け相憐れむの道徳も、弱者病者の劣敗に了るも二つながら生存競争の然らしむる所で相殺になるのであるから、致方はない、即ち弱者病者の劣敗するのが無ければ憐愍の情も起らぬ、弱者病者があるから相助け相憐むの道徳も起るのである。

競争は元來自己満足の慾がら起るので、此慾のある間は競争は止ま

ぬ。競争を停めるには自己放棄に由らねばならぬ、絶對的なる自己放棄は不可能であるから、關係的なる自己放棄に依て競争を緩和する必要がある。關係的なる自己放棄とは個體のみを自我として私慾を逞うする猛烈なる慾望を放棄して、社會、人道を以て自我として之が爲に努力するを謂ふのである。此關係的なる自己放棄は、愛國となり、博愛と爲り、慈善と爲り、同情と爲り、報恩となり、謙讓と爲り、救済と爲る。

更に考察すべき點は人類が有機無機の食餌なくしては生存のできぬ事である。無機體は如何様に使用しても差支ないとしても、有機體を食餌とするは忍び難い感がある、また佛の慈悲心に矛盾するやうに思はれる。併し熟ら考ふれば有機的なる物質や、有機體を食用すべき運命を吾人の有するには深い意味のあることである。吾人の信する所に由れば宇宙間にて人間は最高の動物である、此最高の動物は心靈的活動を爲す。而して心靈的活動の最高なるものは宗教道徳